

シンポジウム

未来をひらけ！ しもつけ古墳群



上三川町かぶと塚古墳



壬生町車塚古墳



栃木市岩家古墳



下野市丸塚古墳

小山市琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳

下野市教育委員会

ごあいさつ

栃木県南部に所在する、下野、栃木、小山、上三川、壬生の3市2町には、当地域を代表する古墳時代後期の大型古墳をはじめ、多数の古墳が築造されています。これらは「しもつけ古墳群」と総称され、当時の社会構造を解明するうえで大変重要な遺跡です。

当市の甲塚古墳や丸塚古墳のほか、各市町の調査の進展により、古墳群の実態と重要性が徐々に明らかになってまいりました。

今回のシンポジウムは、このような重要な文化遺産の存在を多くの皆様にお知らせすることを目的としております。「しもつけ古墳群」についての理解を深め、その保存活用に向けて地域の「未来をひらく」取り組みについて考える機会となれば幸いです。

シンポジウムの開催にあたり、多大なるご支援とご協力を頂きました関係機関ならびに関係各位に心より感謝申し上げます、ごあいさつといたします。

平成30年12月

下野市長 広瀬 寿雄

シンポジウム「未来をひらけ！しもつけ古墳群」

開催目的

当市をはじめ、近隣市町を含めた地域に所在する「しもつけ古墳群」を活用した広域連携による地域づくりを進めるため、シンポジウムを開催いたします。これらは下毛野地域を代表する古墳群で、共通の特徴を有するなど独自の文化圏を形成しており、古墳時代の社会構造を解明する上で非常に重要な遺跡です。こうした遺跡の国指定化を通じて、県南市町の連携強化を図り、歴史をテーマとした地域づくりを考えてまいります。

会場 下野市役所会議室

日程 平成 30 年 12 月 9 日（日） 13 時～16 時（受付 12 時 30 分～）

プログラム

13：00～ **開会・主催者挨拶**

13：10～ **基調講演 「しもつけ古墳群とその時代」**

国立歴史民俗博物館名誉教授 広瀬 和雄 氏
（しもつけ古墳群保存活用指導委員会 委員長）

14：10～ **休憩**

14：20～ **講演 「しもつけ古墳群から読み解く地域首長連合」**

日本考古学協会会員 小森 哲也 氏
（しもつけ古墳群保存活用指導委員）

15：00～ **休憩**

15：10～ **パネルディスカッション**

パネリスト 広瀬 和雄 氏
小森 哲也 氏
栃木県教育委員会文化財課 齋藤 恒夫 氏

しもつけ古墳群保存活用検討会議関係市町

栃木市教育委員会文化課	高見 哲士 氏
小山市教育委員会生涯学習課	鈴木 一男 氏
壬生町教育委員会生涯学習課	君島 利行 氏
上三川町教育委員会生涯学習課	大島 孝博 氏
下野市教育委員会文化財課	山口 耕一

16：00 **閉 会**

しもつけ古墳群の概要

○しもつけ古墳群とは

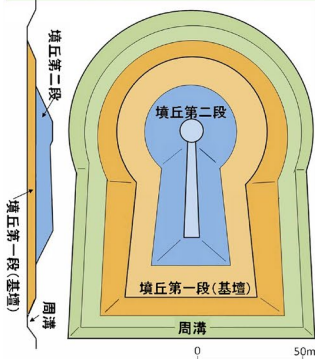
しもつけ古墳群とは、栃木県南部（下野市・栃木市・小山市・上三川町・壬生町）に所在する、この地域に共通した特徴をもつ古墳時代後期（6～7世紀）の大型古墳（首長墓）を一体的に捉えたものです。

○しもつけ古墳群の特徴

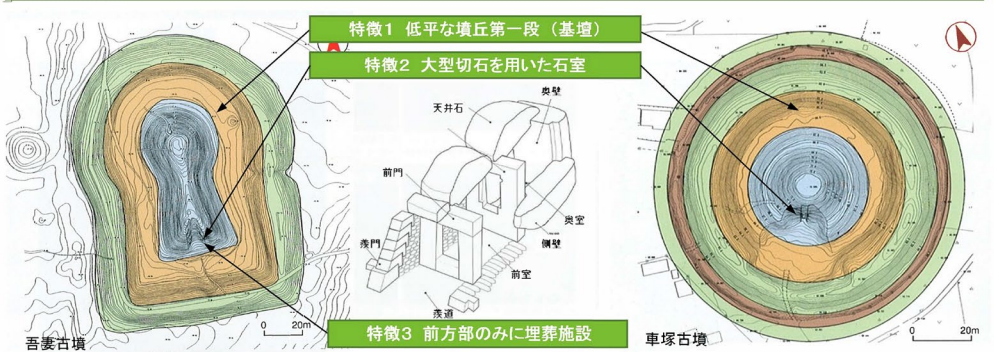
- ①古墳の墳丘に幅広い第一段平坦面（基壇）をもつ。
 - ②古墳は凝灰岩切石を組み合わせた横穴式石室をもつ。
 - ③複数の首長墓系譜が、約14km四方の限られた空間に1つの大きな墓域を形成し、6～7世紀にかけて集中的に前方後円墳や円墳を造る。
- ※前方後円墳においては、前方部前端に埋葬施設をもつ。

「しもつけ古墳群」の保存と活用

1 吾妻古墳墳丘模式図



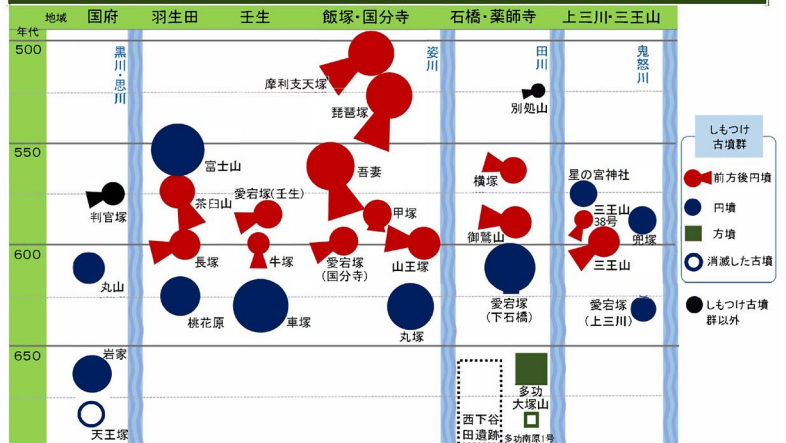
2 下野型古墳の3つの特徴



3 しもつけ古墳群の位置



4 しもつけ古墳群における主要古墳の編年



しもつけ古墳群主要古墳一覧表

番号	地域	古墳名	所在地	指定	墳形	下野型古墳			墳丘			
						基壇	切石石室	前方部石室	規模	段 築	基壇	葺石
1	飯塚・国分寺	摩利支天塚古墳	小山市飯塚	国 昭和53年7月21日	前方後円墳		不明	不明	120.5m	後円部3段 前方部2段?		×
2		琵琶塚古墳	小山市飯塚	国 大正15年2月24日	前方後円墳		不明	不明	124.8m	後円部3段 前方部2段		×
3		吾妻古墳	壬生町藤井 栃木市大光寺	国 昭和45年7月22日	前方後円墳	○	○	○	127.85m	2段	○	×
4		甲塚古墳	下野市国分寺		前方後円墳	○	○	○	80m	2段	○	×
5		国分寺愛宕塚古墳	下野市国分寺	県 昭和53年9月8日	前方後円墳	○	△	○	78.5m	2段	○	×
6		山王塚古墳	下野市国分寺		前方後円墳	○	△	○	90m	2段	○	×
7		丸塚古墳	下野市国分寺	県 昭和53年6月2日	円墳	○	○	—	74m	2段	○	×
8	壬生	壬生愛宕塚古墳	壬生町大字壬生甲	国 大正15年2月24日	前方後円墳	○	不明	不明	77m	2段	○	×
9		牛塚古墳	壬生町大字壬生甲	国 大正15年2月24日	前方後円墳	○	不明	不明	60m	2段	○	×
10		車塚古墳	壬生町大字壬生甲	国 大正15年2月24日	円墳	○	○	—	86m	3段	○	○
11	羽生田	富士山古墳	壬生町大字羽生田	県 昭和32年6月30日	円墳	○	不明	—	86m	2段	○	×
12		茶臼山古墳	壬生町大字羽生田	国 昭和33年6月28日	前方後円墳	○	不明	不明	91m	2段	○	○
13		長塚古墳	壬生町大字羽生田	県 昭和32年6月30日	前方後円墳	○	不明	不明	82m	2段	○	○
14		桃花源古墳	壬生町大字羽生田		円墳	○	○	—	63m	3段	○	○
15	石橋・業師寺	横塚古墳	下野市下古山		前方後円墳	○	△	○	70m	2段	○	×
16		御鷲山古墳	下野市業師寺		前方後円墳	○	○	○	85m	2段	○	×
17		下石橋愛宕塚古墳	下野市下石橋		円墳	○	○	—	82m	2段?	○	?
18		多功大塚山古墳	上三川町多功	町 平成10年7月27日	方墳	×	△截石切組	—	53.8m	2段?	×	×
19	上三川・三王山	上三川兜塚古墳	上三川町上三川	町 昭43年4月1日	円墳	○?	○	—	45m	2段?	○?	?
20		上三川愛宕塚古墳	上三川町上三川	町 昭51年4月2日	円墳	○?	○	—	40m	2段?	○?	?
21		星宮神社古墳	下野市谷地賀		円墳	○	不明	—	43.8m	2段	○	×
22		三王山38号墳	下野市三王山		前方後円墳	○	不明	不明	51m	2段	○	×
23		三王山古墳	下野市三王山		前方後円墳	○	不明	不明	85m	2段	○	×
24	国府	岩家古墳	栃木市大塚町	市 昭和43年2月16日	円墳	○	○	—	61m	2段	○	×
25		天王塚古墳	栃木市大塚町		円墳	○	不明	—	42m	2段	○	×

△：玄門・奥壁：凝灰岩切石 側壁：河原石小口積

○：玄室の側壁・奥壁・天井石に大型の切石を使用し、1枚石を指向。玄門：切石割り貫きor切石組立

横穴式石室			埴輪	保存状態	測量調査の有無	外形調査の有無	埋葬施設調査の有無	時期	
玄室石材	複室・単室	版築							
不明			○	○	○	○保存目的		5世紀末～6世紀初	8
不明			○	○	○	○保存目的		6世紀前半	9
玄門：凝灰岩切石 側壁・奥壁：天井石 緑色岩切石	複室		○	○	○	○保存目的	○	6世紀後半	10a
凝灰岩切石	単室		○低	△ 墳丘第2段改変 西側一部道路開発	○	○保存目的	○	6世紀後半	10a
玄門：凝灰岩切石 側壁：河原石小口積	複室		×	○	○	○保存目的	○	6世紀末～7世紀初	10b
玄門・奥壁：凝灰岩切石 側壁：河原石小口積			×	△ 墳丘の一部と周溝残存	○	○保存目的	○	6世紀末～7世紀初	10b
凝灰岩切石	単室		×	○	○	○保存目的	○	7世紀前半	11
不明			○	○	○			6世紀後半	10a
不明			×	○	○	○保存目的		6世紀末～7世紀初	10b
凝灰岩切石	複室	○	?	○	○	○保存目的	○	7世紀前半	11
不明			○低	○	○	○保存目的		6世紀後半	10a
不明			○低	○	○			6世紀後半	10a
不明			×	○	○	○保存目的		6世紀末～7世紀初	10b
凝灰岩切石	複室		×	○	○	○保存目的	○	7世紀前半	11
玄門・奥壁：凝灰岩切石 側壁：河原石小口積	複室		○低	×	○	○記録保存	○	6世紀後半	10a
凝灰岩切石	複室		○	△ 墳丘裾まで宅地等開発	○		○	6世紀後半	10b
凝灰岩切石床石あり	複室		×	×	○	○記録保存	○	7世紀初	10b
凝灰岩切石切組	複室	○	×	△ 墳丘削平 周溝等残存	○	○保存目的	○	7世紀中頃～後半	12
凝灰岩切石			○	△ 墳丘削平・石室残存周溝は残存か	墳丘削平	墳丘削平	○	6世紀後半	10a
凝灰岩切石			?	△ 墳丘削平・石室残存周溝は残存か	墳丘削平	墳丘削平	○	7世紀前半	11
不明			○	○	○			6世紀後半	10a
不明			×	○	○	○保存目的		6世紀末	10b
不明			×	○	○	○保存目的		6世紀末	10b
凝灰岩切石床石あり			×	△ 周溝・墳丘の一部に道路開発	○	△一部記録保存	○	7世紀中頃～後半	12
奥壁：凝灰岩切石？ 玄門：不明 側壁：河原石小口積 床石あり	単室	○	×	×	○	○記録保存	○	7世紀中頃～後半	12

目次

ごあいさつ

シンポジウムプログラム

しもつけ古墳群の概要

しもつけ古墳群一覧表

目次

基調講演「しもつけ古墳群とその時代」

国立歴史民俗博物館名誉教授 広瀬 和雄 1

講演「しもつけ古墳群から読み解く地域首長連合」

日本考古学協会員 小森 哲也 9

各地のしもつけ古墳群

壬 生 町 17

下 野 市 20

上 三 川 町 24

栃 木 市 25

小 山 市 26

しもつけ古墳群とその時代

広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）

○栃木県南部では、6世紀後半から7世紀前半にかけて、21基もの有力な古墳が、集中的につくられ、しもつけ古墳群と総称される。

○そこには中央政権の地方政策が貫かれている。各地のありかたをみながら、その背景に迫る。

○しもつけ古墳群についての拙稿。

①「下野地域の後・終末期古墳の歴史的意義—6・7世紀東国統治の一事例—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集、2011年a。

②「しもつけ古墳群の歴史的意義—6・7世紀の東国政策をめぐって—」『2010年度壬生町立歴史民俗資料館企画展しもつけ古墳群—下毛野の覇王。吾妻の岩屋から車塚へ—』壬生町立歴史民俗資料館、2011年b。

③「甲塚古墳をめぐる二つの考察」『甲塚古墳』2014年。

○テーマに関する拙稿

①「沓岐島の後・終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集、2010年。

②「終末期古墳の歴史的意義—7世紀の中央政権の地方統治—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集、2013年。

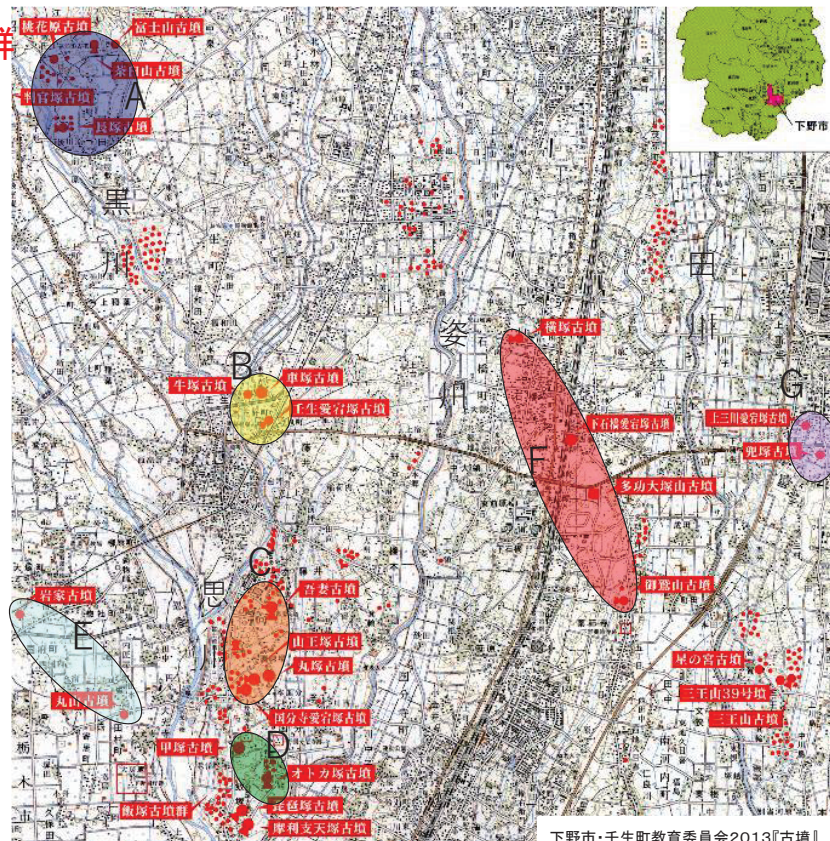


1 しもつけ古墳群

(1) 黒川・思川・姿川・田川流域には、6世紀後半～7世紀前半にかけて、7系譜の有力首長墓(21基)が、集中的につくられる。

(2) 下野地域のなかで、政治的中核を担った首長層が、ここに墓域を結集して、政治的優位性を誇示する。

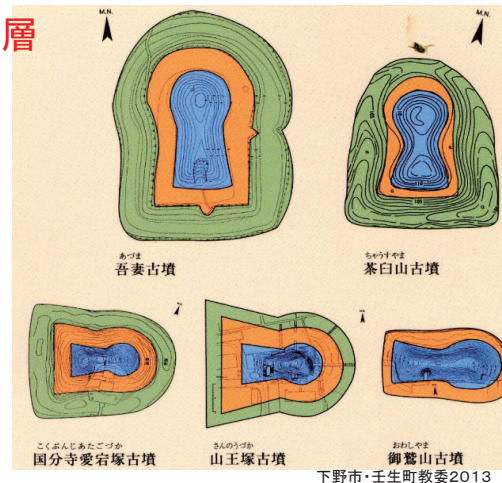
(3) 7グループもの首長墓の共存という事態は、在地首長層の自発性というには「不自然」。その背景はなにか。



下野市・壬生町教育委員会2013『古墳』

2 新しい墓制を共有した7系譜の首長層

- (1) 7首長は2～4代にわたって(Eだけ1代)、大型古墳(前方後円墳→円墳)を造営する。
 (2) 中核首長層は「基壇式の墳丘+整美な石棺式石室」を創出し、共有する。支配層としての政治的結合や一体感をあらわす。
 (3) 墳丘の1段目は低平(右図では、橙色の範囲)で広い「基壇式墳丘」。
 ① 少ない労働量での大型化。
 ② しもつけ古墳群が中心だが、小型前方後円墳や他地域の首長墓も採用。



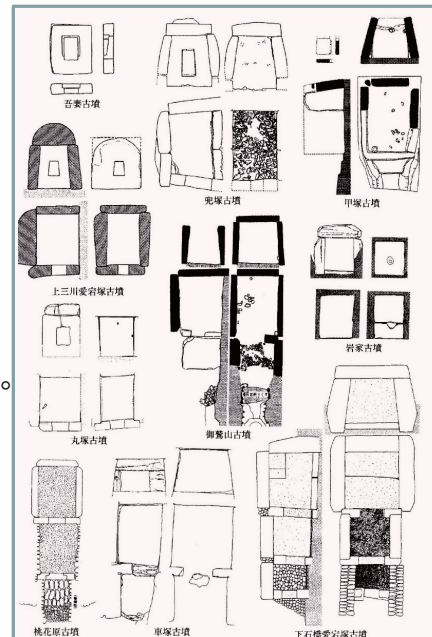
しもつけ古墳群の編年 ●前方後円墳 ○円墳 □方墳 数字は墳長
 広瀬2011a

	1期 6世紀後半	2期 6世紀末	3期 7世紀初葉	4期 7世紀前半	5期 7世紀中頃
A	富士山○ 86 (埴)	茶臼山● 91 (埴)	長塚● 80	桃花源○ 63 (石)	
B		壬生愛宕塚● 78 (埴)	牛塚● 60	車塚○ 82 (石)	
C	吾妻● 128 (埴) (石)	山王塚● 90 (河・切)	国分寺愛宕塚● 78	丸塚○ 74 (石)	
D		甲塚● 76 (埴) (石)	オトカ塚● 32 (河)		
E				岩家○ 61 (石)	
F		御鷲山● 85 (埴) (石)	横塚● 70 (埴) (河・石)	下石橋愛宕塚○ 82 (石)	多功大塚山□ 53 (横)
G		兜塚○ 45 (埴) (石)	上三川愛宕塚 (石)		

(埴) 埴輪, (石) 石棺式石室, (河) 河原石積横穴式石室, (河+切) 河原石・切石併用横穴式石室, (横) 横口式石槨。

3 下野型石棺式石室

- (1) 凝灰岩の切石を組み合わせた整美な石室。
 ① 石棺のような玄室(埋葬空間)に、羨道(通路)が付く。② 6世紀中頃までの東国の横穴式石室とは、形式や製作技法が繋がらない。③ 出雲東部に似ている。<中央を經由しない文化伝播>か。
 (2) 下野中枢部の有力首長層が、独占的かつ排他的に採用する。
 ① 中核首長層(石棺式石室)と周辺首長層(河原石積み)に、下野の首長層は階層的な二元化をとげる。
 ② 6世紀後半になって、多数の有力首長層がつよい政治的結びつきを、共同墓域であらわしたのはなぜか。それは、下野地域だけではなく、列島規模での政治動向を反映している。



広瀬2011a(原図は各報告書など)
 下表の単位はm

支群	名称	玄室幅	玄室長	玄室高	前室幅	前室長	羨道幅	羨道長	全長
A	桃花源	1.8?	2.4?	1.9	1.6~1.8	2.3	1.1	—	5.72?
B	車塚	2.8	2.96	2.15	2.48	2.2	—	—	—
C	吾妻	2.1	2.4	2.4	—	—	—	—	—
C	丸塚	1.64	2.24	2.1	—	—	—	—	—
D	甲塚	2.0	3.0	1.9?	—	—	—	—	4.1?
E	岩家	1.4	2.0	1.6	—	—	—	—	—
F	御鷲山	2.015	2.81	1.96	1.7	約 1.6	約 1.1	約 1.6	—
F	下石橋愛宕塚	2.6	2.6	2.0?	1.9	1.65	約 1.6	約 1.65	約 7.9
G	兜塚	2.1	3.3	2.4	—	—	—	—	—
G	上三川愛宕塚	1.5	2.35	2	—	—	—	—	—



兜塚古墳

4 甲塚(かぶとづか)古墳

〇しもつけ古墳群の課題に迫る前に、二、三の古墳をみておく。

(1) 甲塚古墳は墳長85mの前方後円墳。

① 前方部は小さい。

② 周濠をめぐらす。

(2) 幅広の墳丘1段目に、円筒埴輪と形象埴輪(馬4体・馬子・女性6体、その他10体ほどの人物をならべる。

(3) 前方部に石棺式石室。

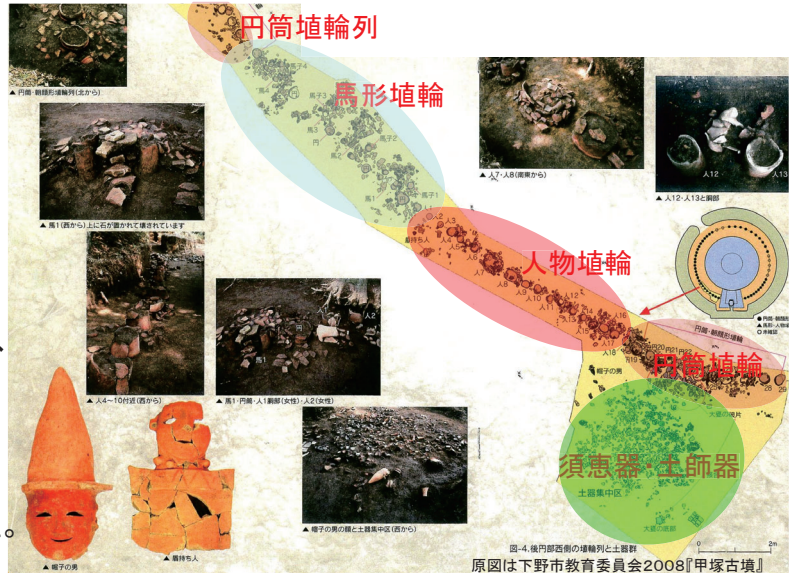
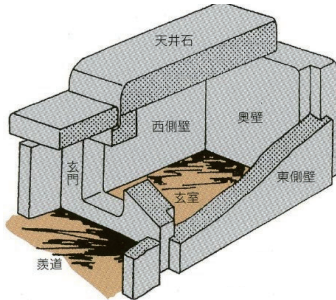


図-4. 後円部西側の埴輪列と土器群

原図は下野市教育委員会2008『甲塚古墳』



円筒埴輪列	馬4⇨	女性6 (容器・織機2 女性1 ↓)	円筒埴輪列	横穴式石室	円筒埴輪列
朝顔形埴輪	馬子4	鉢巻き ↓	朝顔形埴輪		朝顔形埴輪
		盾持人1 ↓	食器群	羨門	
			大甕		

形象埴輪群の配置 (矢印は埴輪の正面方向)

広瀬2014

5 吾妻(あずま)古墳・車塚古墳

(1) 吾妻古墳(右)

① 墳長134mの前方後円墳。2段築成。周濠・外堤・埴輪。

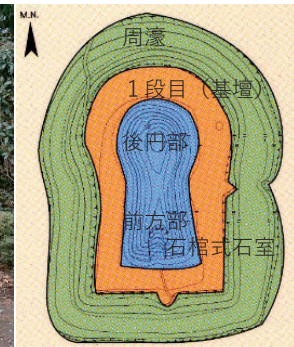
② 前方部に石棺式石室。

③ 刳抜き玄門。

④ 玄室幅1.2m、長さ1.7m、高さ1.1m。刳抜き玄門は幅1.8m、長さ2.3m、厚さ0.5m。



刳抜き玄門



(2) 車塚古墳(下)

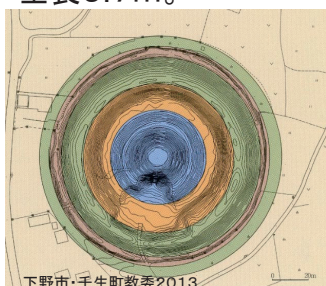
① 直径82mの円墳。3段築成。周濠・外堤・葺石。

② 複室の石棺式石室。組み合わせ玄門。

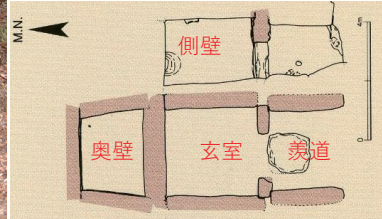
③ 玄室幅2.8m、長さ3m、羨道幅2.5m、長さ2.3m。全長5.7m。



玄室



下野市・壬生町教委2013



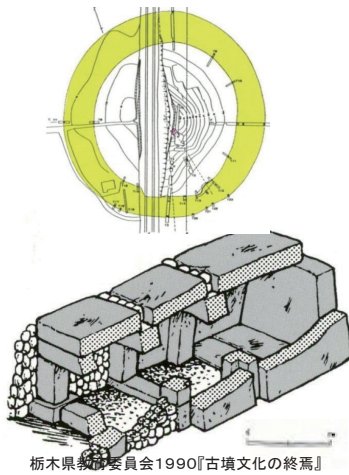
6 御鷲山古墳・下石橋愛宕塚古墳

(1) 御鷲山(おわしやま)古墳(右)

①墳長74mの前方後円墳。②前方部に石室。玄室幅2.0m、長さ2.8m。組み合わせ玄門。③鉄鏃・挂甲・馬具、刀子、鏃、須恵器甕。

(2) 下石橋愛宕塚古墳(下)

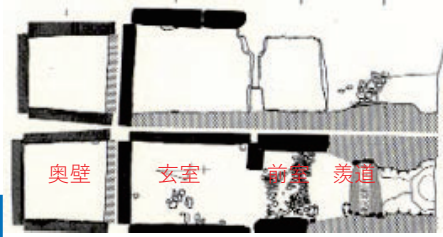
①墳長約84mの前方後円墳。②複室の石棺式石室。全長約7.1m。③飾り馬具、武器、須恵器大甕、土師器杯。



栃木県教育委員会1990『古墳文化の終焉』



下石橋愛宕塚古墳出土の馬具

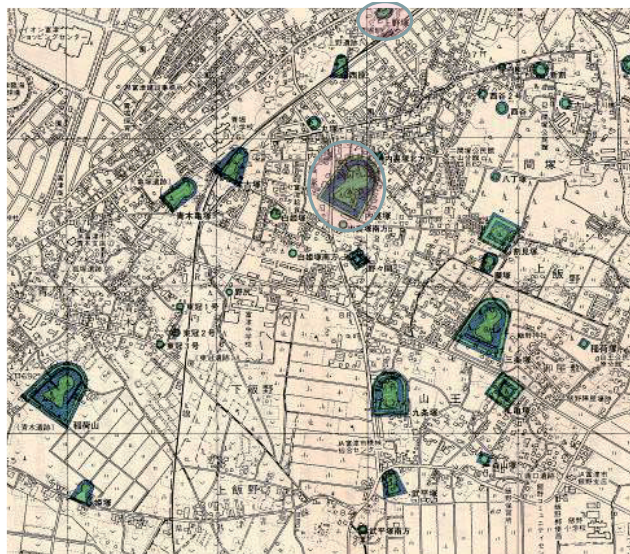


7 6世紀後半の画期

○しもつけ古墳群の築造がはじまった6世紀後半は、全国的に大きな画期である。

(1) 東国では前方後円墳(首長墓)が激増する。「在地の首長が一気に成長した」という、東国の自律的な動向ではとても説明できない。

(2) その一つ。千葉県内裏塚(だいらづか)古墳群。①5世紀は2基。②6世紀後半～7世紀前半の前方後円墳9基、7世紀の方墳4基。③前方後円墳の九条塚(105m)、稲荷山(106m)、三条塚(123m)など。



(財)千葉県史料研究財団編2003『千葉県の歴史資料編考古2』

時期	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	小計
8期	5基	5基	98基	3基	4基	0	0	115基
9期	20基	3基	40基	16基	12基	3基	3基	97基
10期	48基	68基	132基	74基	98基	3基	11基	434基
小計	73基	76基	270基	93基	114基	6基	14基	646基

関東地方の後期前方後円墳 広瀬・太田博之編『前方後円墳の終焉』

8 外交・防衛の拠点 壱岐島の巨石墳①

○6世紀後半、西日本のいくつかの地域では、有力な古墳が集中してつくられる。各地の内発的な動きでは、とうてい解釈できない。二、三の事例をみてみよう。

(1)狭い壱岐島には、6世紀後半～7世紀前半に、約300基もの古墳(長崎県の6割強)が築造される。

①6基の巨石墳(前方後円墳2基、大型円墳4基)の集中は、九州全域でも突出。

②対馬塚古墳→双六(そうろく)古墳→笹塚古墳・兵瀬(ひょうぜ)古墳→鬼の窟古墳・掛木古墳。

③金銅製の圭頭大刀柄頭や単鳳環頭大刀柄頭や亀形辻金具や、新羅土器や緑釉陶器などの優品。

④この「不自然さ」は、壱岐島の在地的な要因では解釈できない。

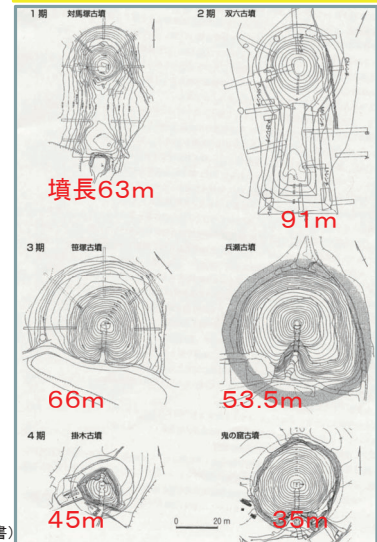
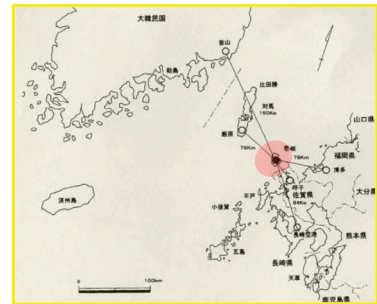
(2)壱岐島に対新羅の外交・防衛拠点が設けられ、筑紫の有力首長と中間層が、その任にあたる。

(3)6世紀後半頃の東アジア情勢。

①562年、新羅が加耶を統合、581年隋が統一。

②崇峻4年(591)「二万余の軍を領て、筑紫に出で居る」、推古10年(602)「来目皇子をもて新羅を撃つ將軍とす。軍衆二万五千人を授く」など(『日本書紀』)。

広瀬2010(原図は各報告書)



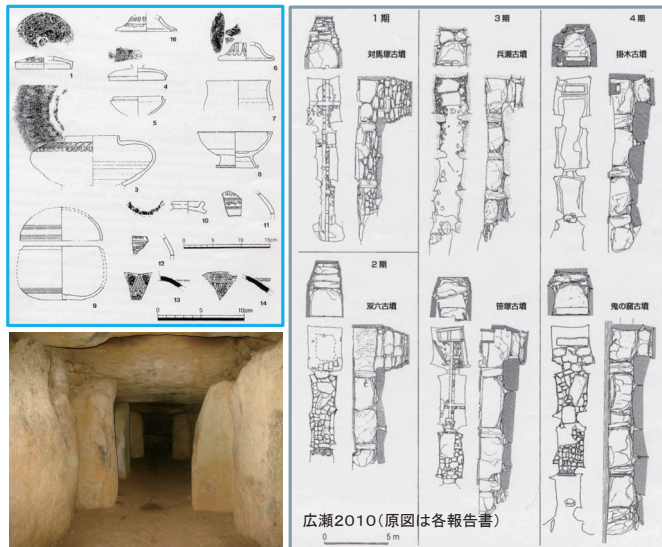
9 壱岐島の巨石墳②



双六古墳



鬼の窟古墳



広瀬2010(原図は各報告書)



壱岐市教育委員会2008『壱岐の古墳』

10 「山陽道」の拠点 備中の巨石墳①

(1) 対新羅の出発港、宗像にいたる「山陽道」の整備。

① 伝統的な河川交通と広域道路の交点に、いくつかの政治センターが設置。

② その一つが備中地域。

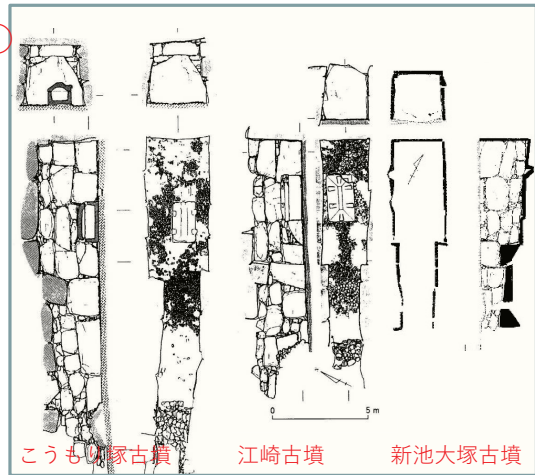
(2) 備中西部(岡山市・総社市)の高梁川と足守川に挟まれた空間に、5人の有力首長が、600年頃に一齐に巨石墳を構築する。

① こうもり塚、江崎、鳶尾塚(とびおつか)、新池大塚、道満塚1号墳の巨大な横穴式石室は、同一形式で同時期。

② 5基は6世紀末に一齐につくられるが、それらにつづく巨石墳は1基あるだけ。

③ こうもり塚や江崎は、刳抜き式家形石棺をもった前方後円墳で、単鳳環頭大刀、鉄鏃、飾り馬具、鉄滓、須恵器などを副葬。

④ ちなみに、奈良県石舞台古墳の横穴式石室は、玄室長さ7.7m、全長20.5m



岡山県史編纂委員会編1976『岡山県史第18巻』など

	墳形	墳長	玄室幅	長さ	高さ	玄室面積	玄室容積	石室全長
こうもり塚古墳	前方後円墳	100	3.6	7.7	3.6	27.8	100.07	19.4
江崎古墳	前方後円墳	45	2.6	6.6	2.9	17.2	49.88	13.8
新池大塚古墳	方墳	18.6	2.3	4.8	2.	11.3		10.9
鳶尾塚古墳	円墳	20	2.2	約6.45	2.4以上	14.19		約12.6

11 備中の巨石墳②

(1) 狭い場所に、6世紀末頃の一代だけ、5人もの有力首長が一齐に巨石墳。

① 周辺に生産基盤は少ないので、在地に基因した動向とみなすのは「不自然」。

② 前段階の5世紀後半~6世紀中頃の有力首長墓はない。

③ 5世紀前半~中頃には造山古墳、作山古墳が造営される。

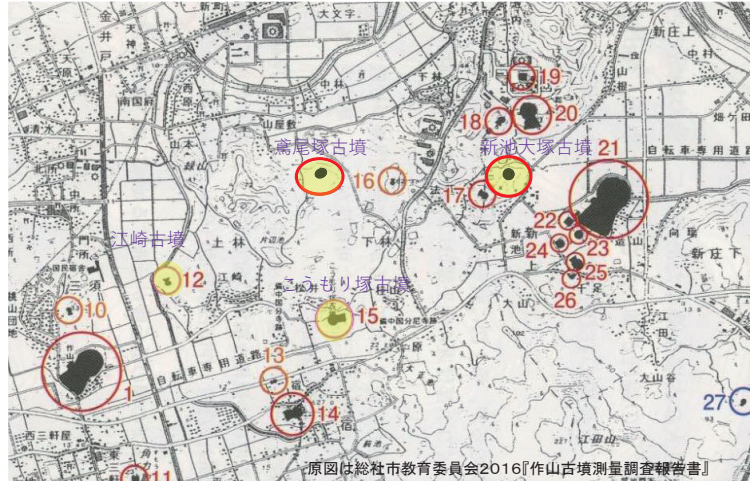
(2) 5世紀に加えて、600年頃にも「場の論理」ともいべき外在的な意志が働く。

① 「山陽道」と河川の交点、水陸交通の結節点に、政治センター的な役割。

② 巨石墳が「目で見える王権」として、中央政権と一体となった在地首長層の勢威を、往来する人びとに見せつける。



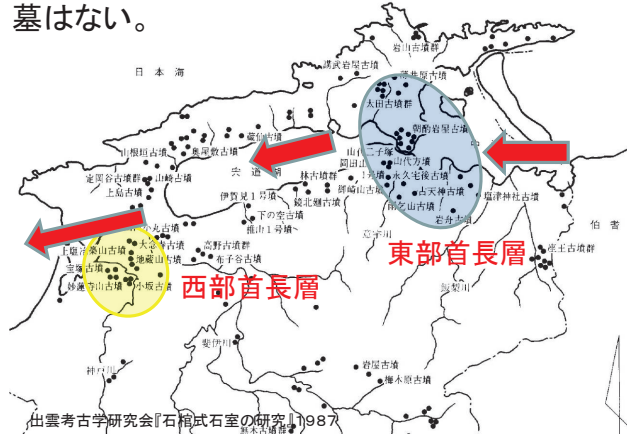
こうもり塚古墳



原図は総社市教育委員会2016『作山古墳測量調査報告書』

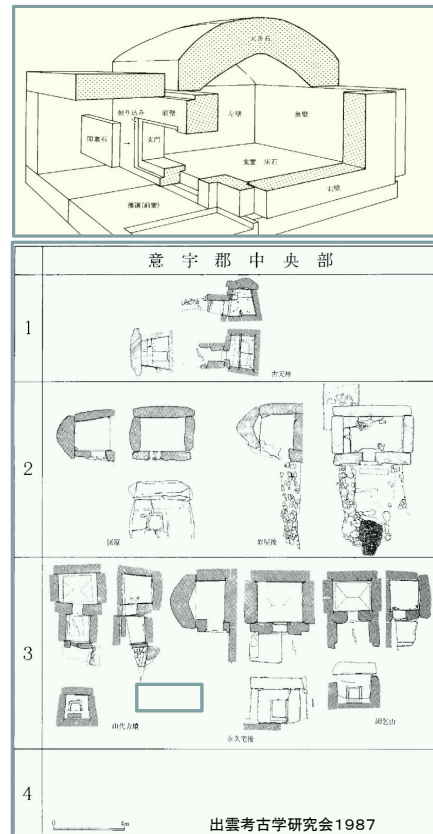
12 「山陰道」の拠点 出雲の東部と西部

- (1)「山陽道」とほぼ平行して「山陰道」も整備され、水運との交点に政治センターが設営される。
- (2)6世紀後半、出雲の東西首長層は、異なる墓室で<支配層の帰属意識>を表わす。
- (3)出雲東部の首長層は、畿内の墓室とは大幅に異なる石棺式石室を創出する。
- (4)出雲西部の有力首長層は、家形石棺と巨石横穴式石室の組合せで、大筋では畿内の有力首長墓に相似。ここでは、5世紀中頃~6世紀中頃の首長墓はない。



13 出雲東部の石棺式石室

- (1)家形石棺に羨道を付けた独自の石室が、出雲東部で6世紀後半に出現する。
 - ①刳抜き玄門で、各壁・天井石・床石は凝灰岩の切石。
 - ②東部の首長層が、<われわれ意識>の発露、ステータスシンボルとして考案。
- (2)律令期の意宇郡・島根郡に約40基。伯耆・因幡などの傍系石室もふくめて80余基が、6世紀後半から7世紀前葉の短期間につくられる。
- (3)東部首長層は、等質的な構成をみせる。
 - ①一部を除くと方墳。
 - ②墳丘や石棺式石室は規模・構造ともに均質。



14 出雲西部の巨石墳

(1) 6世紀後半~7世紀前半、多数の首長墓が集中的に造営される。

①第1期(6世紀後半)。大念寺古墳●、妙蓮寺山古墳●、半分古墳●、宇那手塚山古墳○、山根垣古墳口、大槌古墳。②第2期(6世紀末~7世紀初頭)。上塩冶築山古墳○、放れ山古墳○、塚山古墳、刈山4号墳。③第3期(7世紀前半)。地蔵山古墳、宝塚古墳、小坂古墳、石臼古墳、光明寺2号墳、布子谷古墳、武部西古墳、出西小丸古墳○、左皿谷奥古墳、高野1号墳、高野2号墳。④周辺に横穴墓が群集。

(2) 南北に、二つの有力首長墓系譜が各3代つづく。

①北群は大念寺→上塩冶築山→上塩冶地蔵山。②南群は妙蓮寺山→放れ山→宝塚。

(3) 「神門水海(かんだのみずうみ)」を見下ろすように築造。

(4) 中海→宍道湖→「神門水海」→日本海の水運ルートが、6世紀後半以降、重要な役割。



15 西暦600年前後の政治動向

(1) 6世紀後半~7世紀前半、限られた地域に、有力古墳が集中的に造営される。

①列島各地を覆う動向なので、各地首長層の意志を超えた中央政権の力が働く。

②壱岐島を先端とする、外交・防衛という対外的な要因。

(2) 対新羅(唐)の外交政策。交通路の整備をともなう広域首長層の再編。

①壱岐島に外交・防衛の拠点。②宗像が発発港。③「山陽道」に政治センター。防府市、三原市、福山市、たつの市、岡山市・総社市。④「山陰道」に政治センター。出雲市、松江市、養父町ほか。⑤瀬戸内海運。観音寺市、坂出市、みやこ町、別府市。(今回は①と、③の一部と、④の一部だけふれたが、他の諸地域でも多数の有力古墳)

(3) 東国首長層は兵站—物資・兵・馬の供給—の役割を担う。

①東国では個々の首長が統治対象。
②そうした地方政策にたいして、各地で首長層が再編。
③下野地域では、河川交通を掌握した中核首長層の結集(国府勢力につながる)と周辺首長層への二元化。



原図は木下良『事典日本古代の道と駅』2009

しもつけ古墳群から読み解く地域首長連合

小森 哲也（日本考古学協会員）

はじめに

しもつけ古墳群はなぜキチョウなのだろうか？わたしたちが住む栃木県域には、壊されたものも含めて古墳が約 6000 基ある。そのうち前方後円墳は 281 基、前方後方墳は 24 基ある。ここ下野市やその周辺市町に住むみなさんにとっては、古墳はそれほど珍しいものではないかもしれない。ありふれた身近にあるものとも言える。一方、土地を活用する側面からは、古墳や遺跡のために家が建てられなかったり、せっかく契約したのにソーラーパネルの設置が遅れたり、現代人にとってはジャマモノに見える時があるかもしれない。もしかすると行政側が勝手に遺跡を守る目的で「貴重だ」と言ってるだけじゃないのか？ 開発の当事者や遺跡に対する関心が薄い方々からすれば、そんな疑問をもつ人が当然存在するだろう。「貴重だ」の中身が知りたいのだ！と。ただ保存するだけじゃなく、活用してくれ！と。

今日の私の話は、まず、機織形埴輪の出土によって全国的に有名になった甲塚古墳の墳丘や石室の特徴を明らかにする。次に、周辺的大型古墳を含む古墳群と比較しながら、首長（豪族）たちの動きを探り、古墳時代後期の社会について読み解く。これは、とりもなおさず、われわれの共有財産そして資源としてのしもつけ古墳群の歴史的価値について考えることになる。

1 下野型古墳の特徴を甲塚古墳から考える

(1) 甲塚古墳の墳丘は二段築成

二段重ねのお供えもちを思い浮かべてみよう。①第一段の高さが低い、②第一段の直径が 80m（平坦面は 61m）あるのに対し、第二段の直径は 34m と小さい。①と②の特徴から、墳丘第二段のまわりに幅 13.5m の低くて広い平坦面ができる。これを基壇（きだん）とよぶ。盛土量が少ないことに注目して「手抜き」あるいは「省力化」と考える研究者がいる。しかし、甲塚古墳の調査からこの基壇面は埴輪や須恵器による墓まつりが行われていたゾーンであることが明らかになった。非常に重要な調査成果だ。

(2) 石室は、後円部ではなく前方部にある

通常はくびれや後円部に造られる。しかし、しもつけ古墳群は独特で、東西主軸の前方後円墳の場合は、前方部南側のくびれ部寄り、甲塚古墳のように南北主軸の場合は、前方部の前端に石室が造られる。

(3) 大型の凝灰岩切石で造った石室（石棺式石室）

墓室（玄室）は長さ 3m、幅 2m、高さ 1.9m で大きな凝灰岩切石を箱形に組み立てて造られていた。玄室入口は大きな板石を削り貫いている。底石はない。このような横穴式石室を特に石棺式石室とよぶ。栃木県南部の他、遠く離れた島根県東部、鳥取県西部、熊本県にみられる特徴である。

石棺式石室の変遷は、①側壁が内側に傾く→直立する、②石室の入口部（玄門）の形が長方形→正方形へ、③墓室（玄室）の平面形が長方形→正方形へ、形態が変化する。したがって甲塚古墳の石棺式石室は側壁が内側に傾き、墓室の平面形が長方形なので 6 世紀後半に位置づけられる。

2 下野南部におけるしもつけ古墳群から考える

Q1 しもつけ型古墳とは？

栃木県の南部、思川および姿川流域（行政区画では、壬生町、下野市、上三川町、小山市、栃木市の一部にあたる）には、大型の前方後円墳および円墳が集中して築造された。50m を超える前方後円墳が 15 基、円墳が 7 基、方墳が 1 基と下野の最高ランクの首長層の墓域となる。これらの首長墓は、6 世紀後半以降、①墳丘の第一段目に低平で幅の広い、いわゆる基壇をもつ、②前方部に石室をもつ、③大型の凝灰岩切石を用いた横穴式石室（下野型石棺式石室）をもつ、以上の 3 要素を共有している。この 3 つ

の特徴を備えた古墳を下野型古墳と呼称することが提唱されている（秋元・大橋 1988）。ただし、“地方の時代”を強調しすぎてはならない。独自性とともにもう一方では、前方後円墳という共通の形の墓を採用し、列島内のさまざまな地域の首長と同一歩調をとって畿内王権と結びついてきたからである。

しもつけ古墳群は、南 14km、東西 13kmの範囲に分布する古墳群の総称である（秋元 2007・君島 2011・広瀬 2011）。互いに視認できることを群の構成要素とする立場からは、広すぎるとの批判がある。確かに、埼玉古墳群(0.6×1km、若小玉古墳群を含むと 3×5km)、総社古墳群(3×2.5km)、内裏塚古墳群(2.2×1.8km)、玉里古墳群(2.5×2.3km、高浜入古墳群としては 7×6km)など東国の主要古墳群と比較するとかなり広い群設定だ。しかし、私は古墳群を規定する「群としての一体性」を保証する空間的特性(古墳相互の可視性)と歴史的評価という二項の不可欠要素(林正憲 2011)のうちの後者に注目する。後述するしもつけ古墳群の卓越性、階層性、継続性、集約性、独自性、の5点から導かれる政治的一体観を重視したいのである。しもつけ古墳群は歴史的背景を重視した群設定である、と捉えることができる。

古墳群は、丘陵の縁辺部を中心に形成され、地形が南流する河川によって区分されていることから、古墳の分布をもとにして6地域に分けられる。思川右岸にあたる**国府**地域、黒川上流左岸の**羽生田**地域、その下流左岸の**壬生**地域、黒川と思川の合流地点からその下流の**飯塚・国分**地域、姿川と田川に挟まれた**石橋・薬師寺**地域、田川左岸の**上三川・三王山**地域の6地域である。大規模古墳とともに小規模古墳も多数営まれている特徴を分布図から読み取ることができる。最高首長墓だけでなく、複雑な階層差を反映した中小の古墳が一体となって墓域を形成した約100年の累積の結果がしもつけ古墳群だったのである。

Q2 6つの古墳のまとまりは何を表しているの？

3要素を共有するしもつけ古墳群は、6つの地域のうち、どこか一つだけが飛び抜けて大きい、ということはなく、同じくらいの勢力をもつ豪族が集まって古墳群を形成したと考えてよい。たとえば、6世紀後半から末前後に築造された羽生田地区の長塚古墳(82m)、壬生地区の壬生愛宕塚古墳(82m)、飯塚・国分地区の国分寺愛宕塚古墳(78m)・国分寺山王塚古墳(90m)、石橋・薬師寺地区の御鷲山古墳(85m)、三王山・上三川地区の山王山古墳(85m)の規模は、ほぼ80m台である⁽¹⁾。これらの古墳たちを私は、しもつけ80m'sと呼称している。ほぼ同時期・同規模の前方後円墳が複数築造されている実態から判断すれば、それぞれの地区が連携して継続的に造墓していたことがしもつけ古墳群の特徴の一つと考えてよいだろう。したがって、墓の形、墓室の特徴、墓まつりを共有する**6つの首長系譜(代々の豪族のつながり)**がたどれる集団が存在したことを示す。つまり、しもつけ古墳群は、**6集団による首長連合体制の存在を示す共同墓地**なのである。

3 しもつけ古墳群を理解するための5つのカギ

(1) **卓越性** 栃木県域における6・7世紀において、それぞれの時期において最も大きい古墳が造られたのは、しもつけ古墳群である。

(2) **階層性** 石棺式石室は、大規模古墳に限定され、中・小規模古墳は、河原石を用いた横穴式石室を採用する。前方後円墳の規模は4ランク、円墳は3ランクに分けることができる。この時代には、複雑な階層差があったことを、古墳の形、大きさ、埋葬施設の三つの要素から読み取ることができる。

(3) **継続性** 6世紀後半～7世紀にかけて100年以上も大規模古墳が代々継続して営まれている。

(4) **集約性** しもつけ古墳群は、6集団による首長連合体制の存在を示している。広瀬論による「複数系譜型古墳群」となる。私は大規模古墳だけでなく、その周囲に中小古墳が集中して営まれていることに注目している。一方では、同時期の大規模集落がしもつけ古墳群内にみられない。居住は制限され、墓域の聖域化が図られたのである。**なぜ集約したのか？**3つの可能性を示しておきたい。①首長系譜の

固定化とメンバーシップの表明・公示、②首長間のパワーバランスを保つ、③外圧に備えた地域の結集、①と②については、現状を維持し、持続可能な社会を目指す首長連合体本来の姿が見える。さらに③は古墳群の威容によって確固たる団結を往来者にみせつけるという観点(広瀬 2012 など)からは、交通路とも密接に関連するだろう。しもつけ古墳は、5世紀には成立していた原東山道ルートに近接している。

(5) 独自性 下野型の3要素を共有する。そのひとつである基壇は6世紀後半以降に大型古墳から小円墳まで採用された墳丘の造り方である。背景に個性的な墓の形に対する共通の意識がある。基壇上で行われた墓まつりと関連する。基壇は6世紀末～7世紀初めの前方後円墳終焉以降も大型円墳・方墳に引き継がれる特徴である。同様に引き継がれる下野型石棺式石室とともに、この2つの要素には、近畿地方の王権との関係性を示す前方後円墳の築造とは別次元の地方の独自性としての意義が予想される。

有力首長層は、連帯感を強め、安定した持続可能な社会をつくる目的で、同じ墓まつりの場(基壇)と墓室(石棺式石室)をもつ古墳をしもつけ古墳群という墓域に集約した。メンバーシップを表明して墓まつりを実修することは、配下の者も含めた人と人のつながり、地域の連帯感、そして地域と地域の連携をより強固にするための重要な政(まつりごと)であったのである。

おわりに

わが国の古墳時代後・終末期(6～7世紀)における社会を考える時、東国の一地方にすぎないこの地に残されたしもつけ古墳群がもつ情報量は列島随一だと考えている。なぜなら現地足を運べば、古墳の高まりと大きさ、石室の威容、周湊の深さをわれわれの目で実際に確認できるからである。**実体的に1400年を飛び越えることができるのである。**われわれの祖先が古墳群を守り伝えてきたおかげだ。

当日は、しもつけ古墳群を擁する5市町の担当者からそれぞれの古墳愛が熱く語られるだろう。今、われわれが試されているのは、先人たちが1400年前の過去から連綿と受け継いできたこのしもつけ古墳群の重要性を認識し、しっかりと未来へバトンを渡せるかどうかだ。地元住民、市民、県民、そして国民としてひとりひとりが当事者意識をもち、合意を形成して行動に移せるかどうかだ！かつてしもつけ古墳群に結集した有力首長たちやその配下の人々、そしてこの古墳たちを大切に受け継いできた先人たちは、どんな想いでわれわれの生き方をみているのだろうか。「あいつら、いつまでたってもなかなか纏まんねえなあ・・・。」とか。いや、いや、大丈夫。知ることは愛することだ。

〔注〕

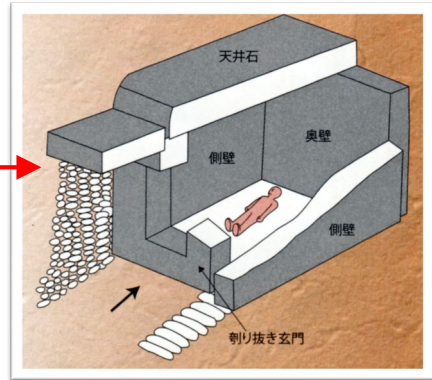
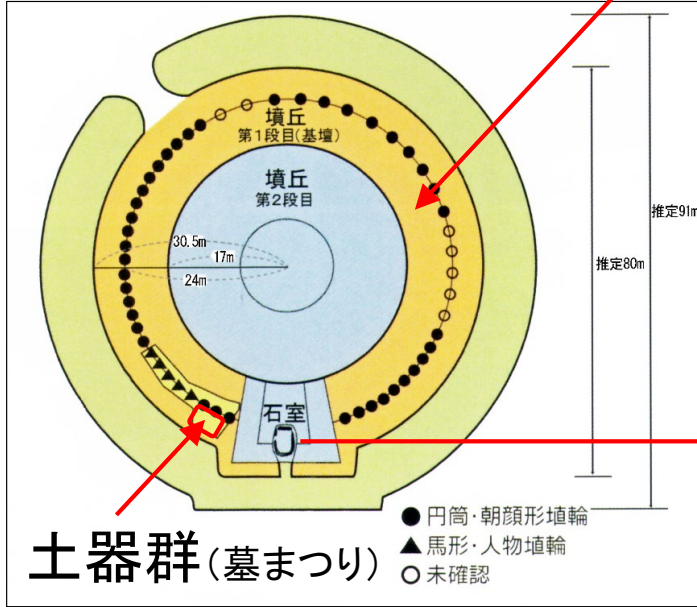
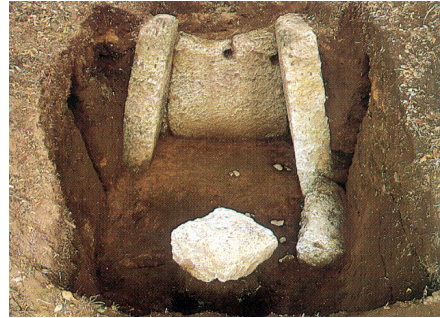
(1)しもつけ古墳群前段階の摩利支天塚(方円・120m)・琵琶塚古墳(方円・123m)やしもつけ古墳群最大の吾妻古墳(方円・128m)は80m'sの1.5倍にあたる120m台。6世紀後半の大王墓である奈良県五条野丸山古墳(310m)は4倍の規模、終末期古墳である栃木の壬生車塚古墳(円・84m)、下石橋愛宕塚古墳(円・82m)、埼玉の八幡山古墳古墳(円・80m)、千葉の岩屋古墳(方・80m)の「終末期関東80m's」も偶然ではあるまい。また、霞ヶ浦高浜入りでも5世紀後半の権現山(方円、89.5m)、富士見塚(方円、80m)、三昧塚(方円、82m)、6世紀前半の山田峰(方円、83.6m)、滝台(方円、80.5m)、大井戸(方円、86m)と時間差をもって「高浜入り80m's」が形成されているのは興味深い。

〔参考文献〕

- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会
君島利行 2011 「しもつけ古墳群とは」『しもつけ古墳群』壬生町歴史民俗資料館
小森哲也 2015 『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房
小森哲也 2016 「横穴式石室と地域首長連合」『とちぎを掘るー栃木の考古学の到達点ー』随想舎
林 正憲 2011 「文化財」としての古墳群『月刊文化財』第572号 第1法規株式会社
広瀬和雄 2008 「下野地域の後・終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集 国立歴史民俗博物館
広瀬和雄 2012 「東京湾岸・「香取海」沿岸の前方後円墳ー5～7世紀・東国統治の一事例ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集 国立歴史民俗博物館

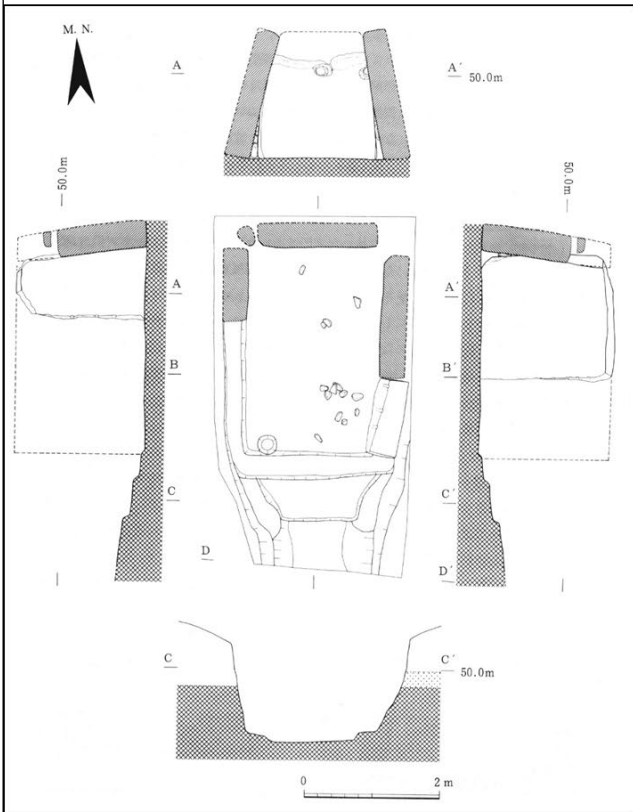
甲塚古墳は二段築成だ
石室は前方部にある

基壇(きだん)

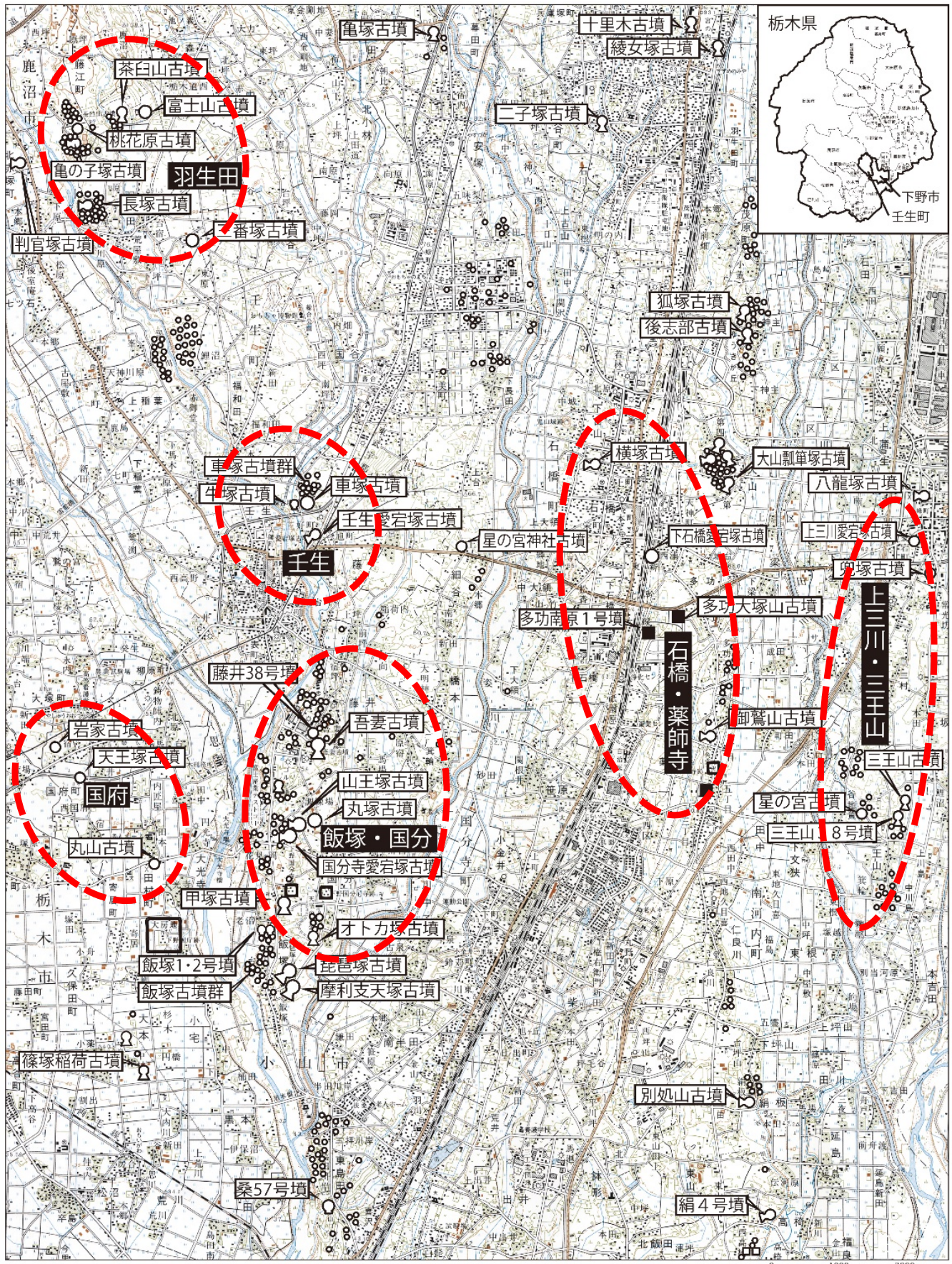


土器群(墓まつり)

甲塚古墳の石棺式石室



年代・編年	石室図
I 550	1 吾妻古墳 2 国分寺甲塚古墳 3 上三川兜塚古墳
	4 御鷲山古墳 5 下石橋愛宕塚古墳
II 600	6 壬生車塚古墳 7 上三川愛宕塚古墳 8 国分寺丸塚古墳 9 大塚岩家古墳 10 多功大塚山古墳
III 650	
IV	
V	



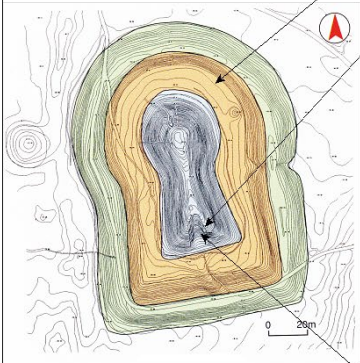
栃木県南部における主要古墳の分布

下野型古墳とは？

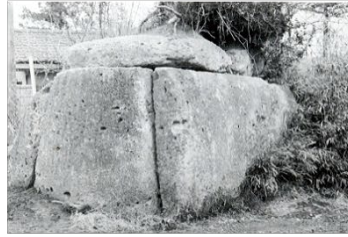
特徴1 低平な墳丘第一段（基壇）

特徴2 大型切石を用いた石室

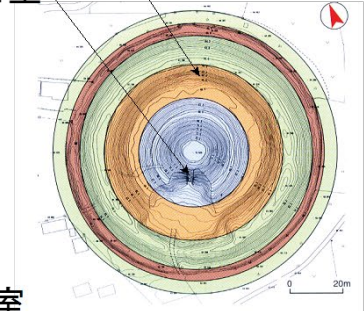
特徴3 前方部だけに埋葬主体



吾妻古墳 (128m)



上三川兜塚古墳の石棺式石室

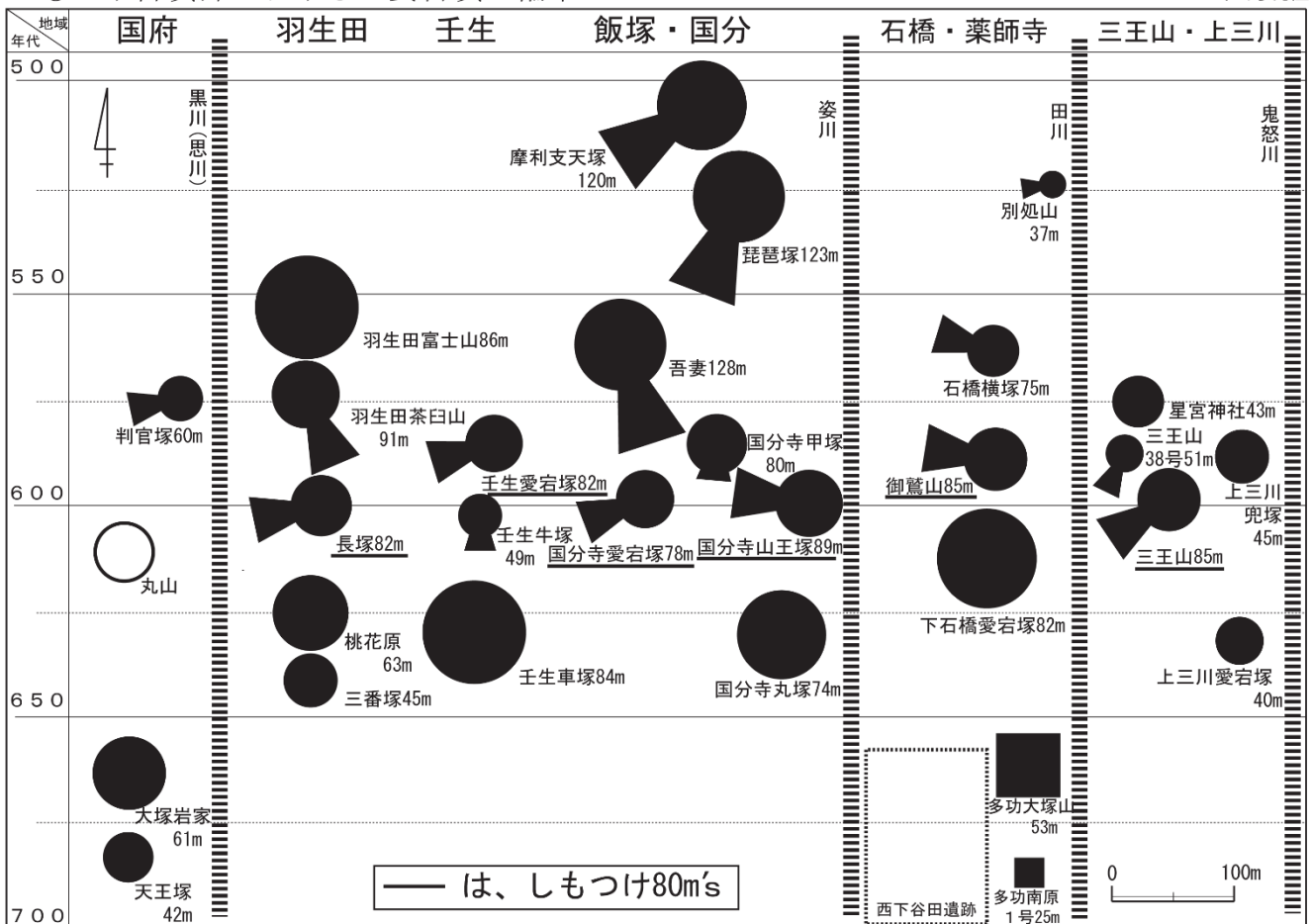


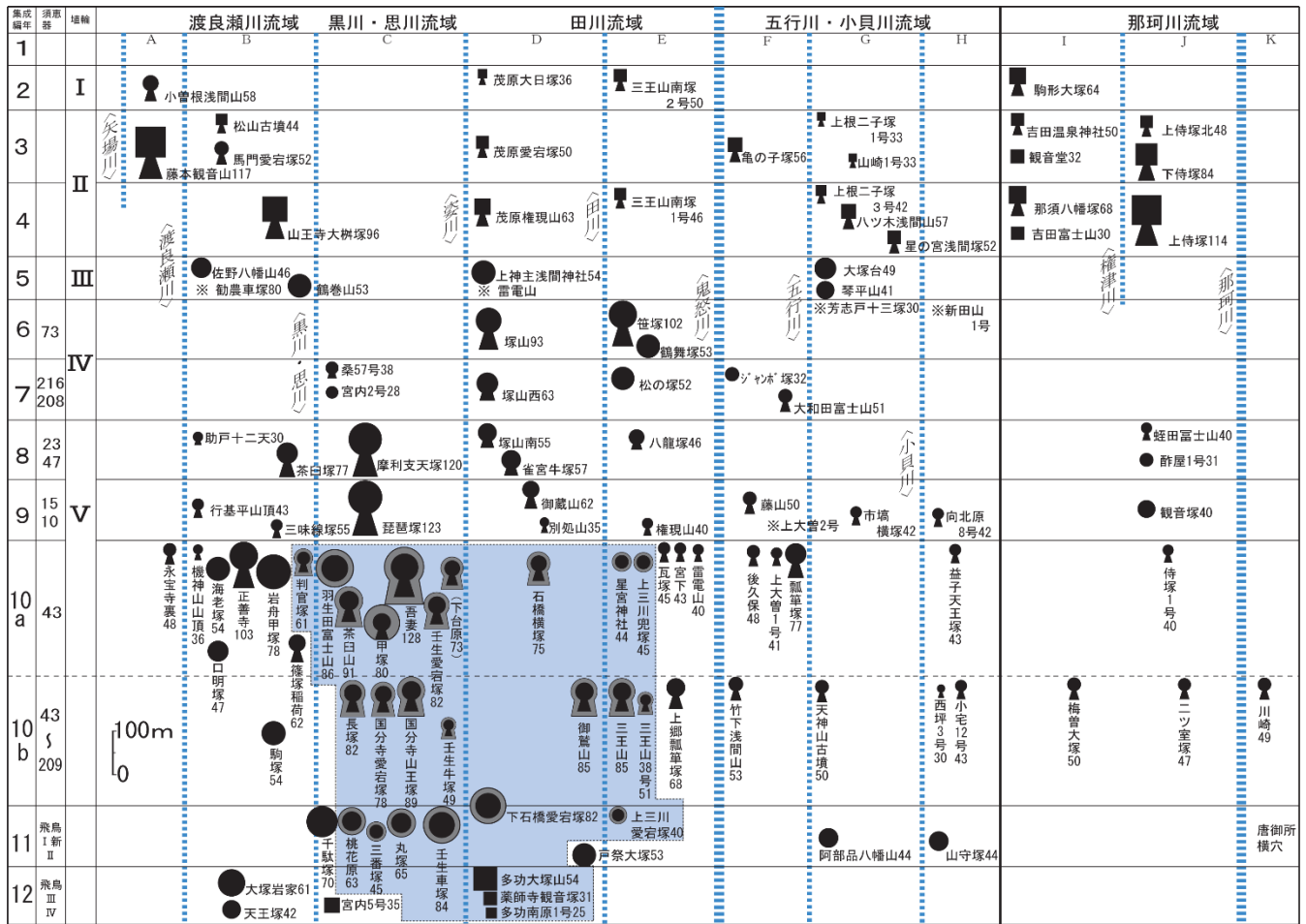
壬生車塚古墳 (86m)

下野型古墳 3つの特徴

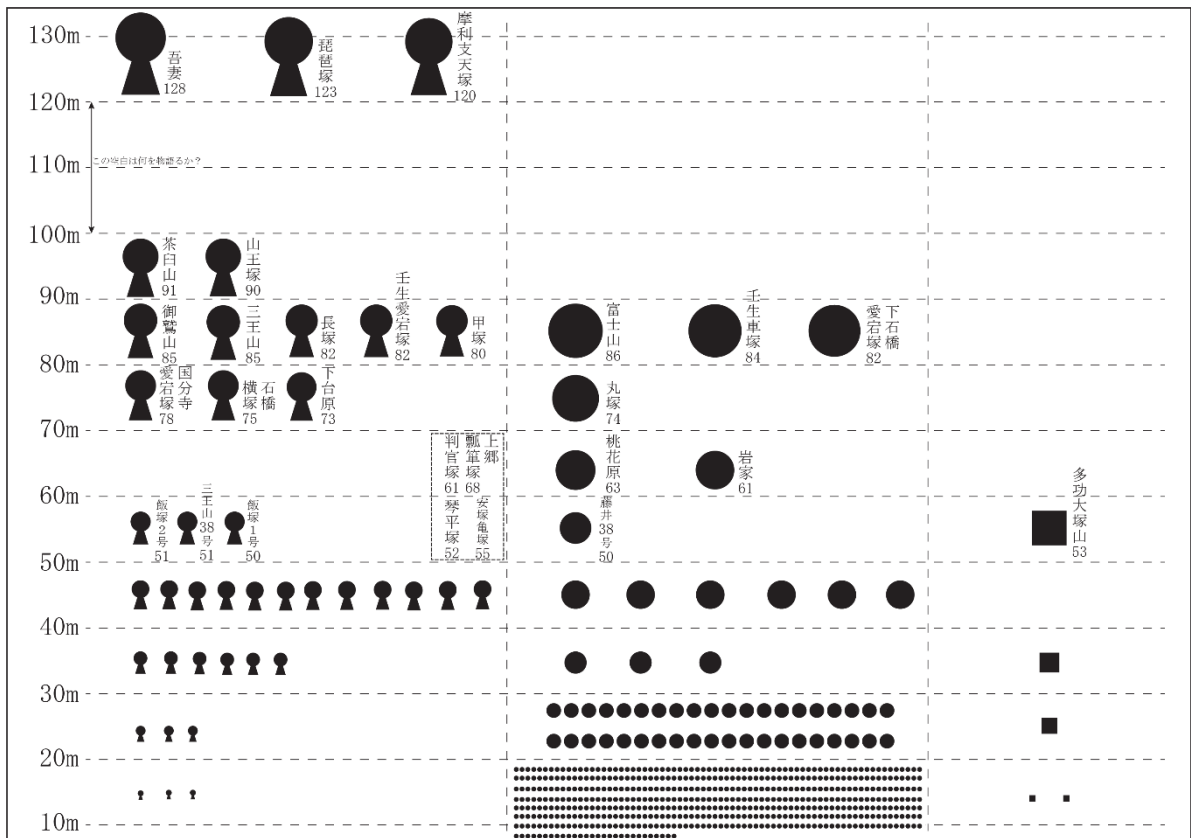
しもつけ古墳群における主要古墳の編年

2018年2月現在

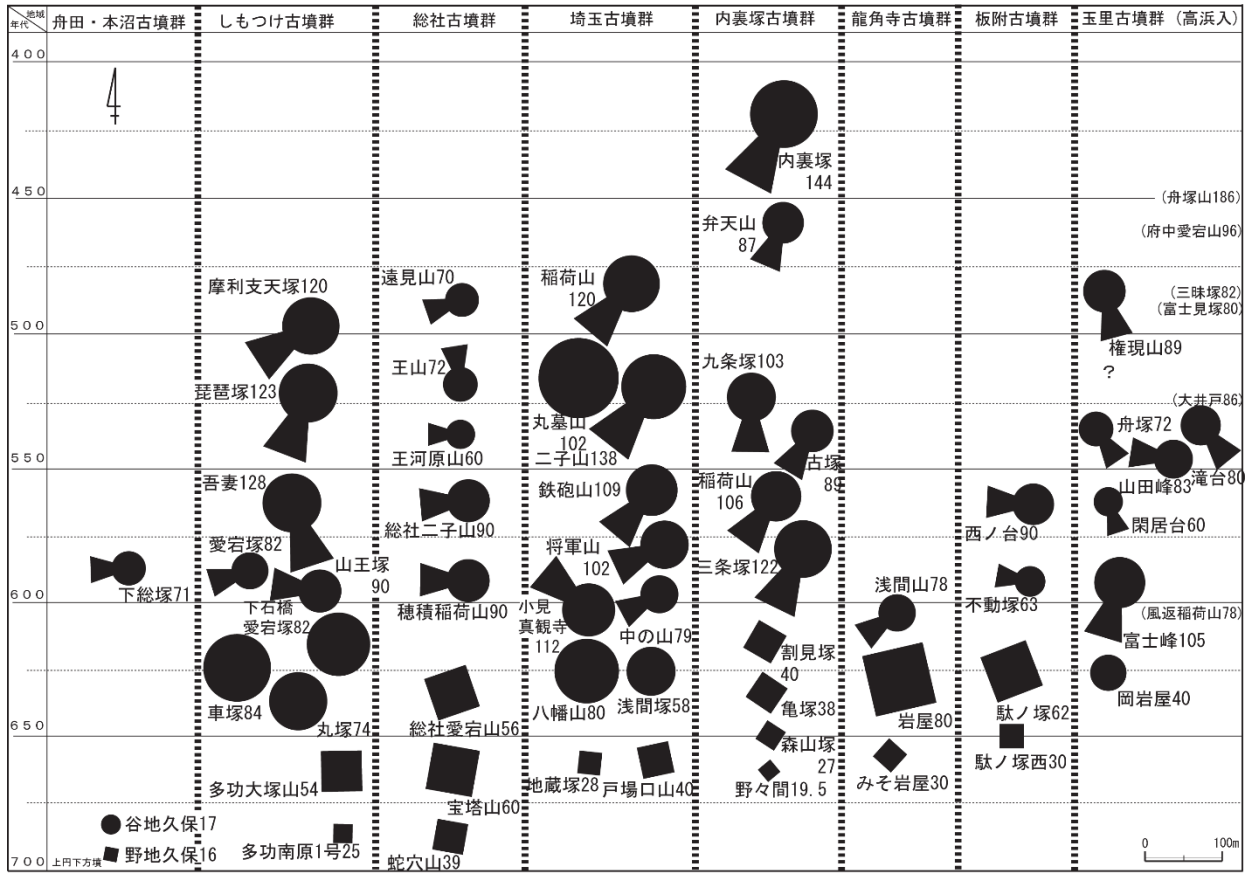




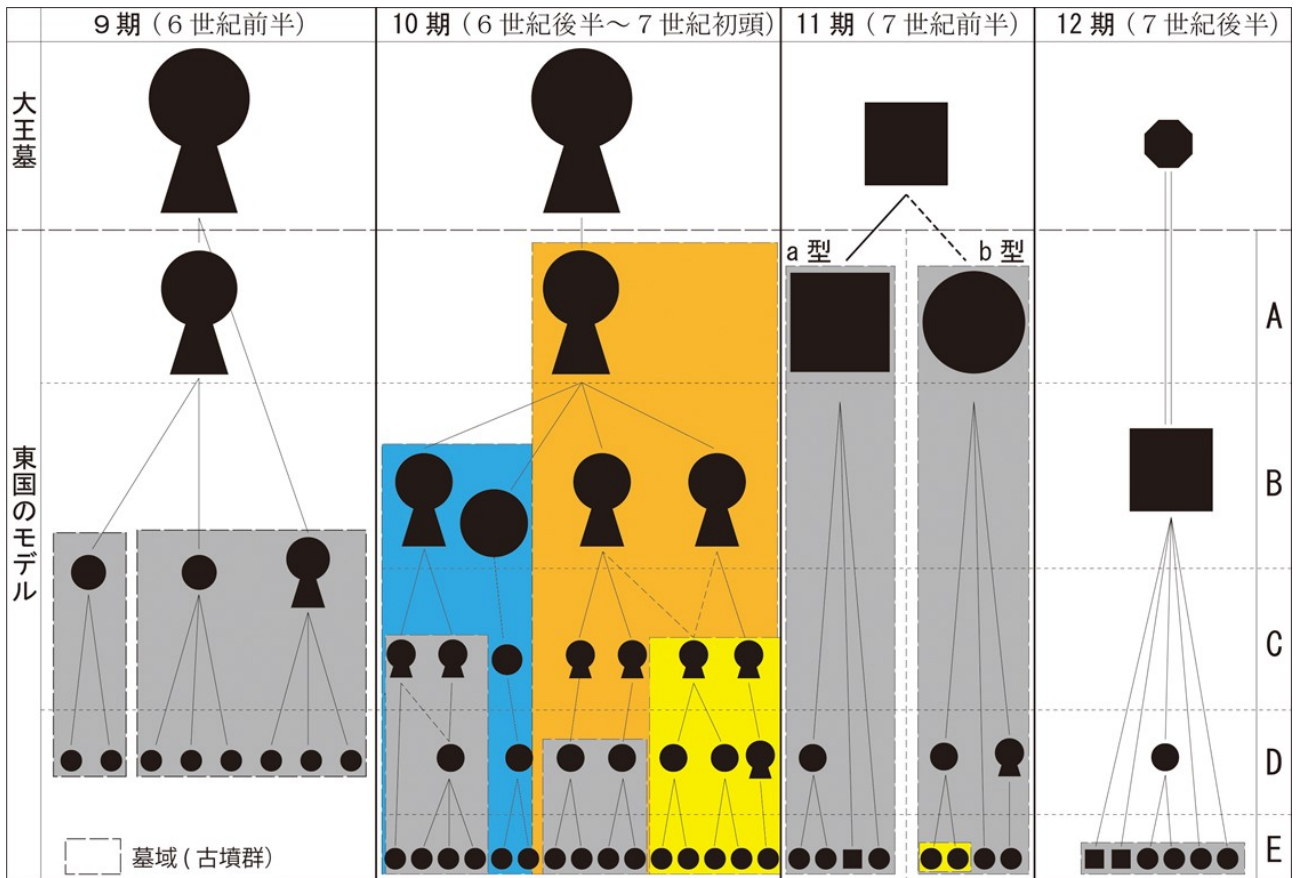
栃木県における古墳編年



しもつけ古墳群における古墳の規模と築造数



5～7世紀における東国の主要古墳群の展開



古墳からみた6～7世紀の社会構成モデル

壬 生 町 茶白山古墳・富士山古墳・長塚古墳・桃花原古墳

吾妻古墳・愛宕塚古墳・牛塚古墳・車塚古墳

現在の壬生町には多くの古墳がありますが、その多くは町の中央部を流れる黒川流域と町の東端部を流れる姿川流域に築かれ、ほとんどの古墳が6世紀の後半から7世紀前半に造られた古墳です。

とくに、今回のシンポジウムのテーマでもある「しもつけ型」と称される古墳は黒川流域に認められ、上流部の羽生田地区と約3km下流の壬生地区に歴代の権力者の墓が代々築かれます。それでは二つの地区に築かれた権力者の墓を見ていきます。

〔羽生田地区〕

黒川東岸の丘陵や台地上に築かれます。6世紀の後半代に入り標高100mを超える丘陵上に、大型埴輪群をもつ茶白山古墳、富士山古墳が築かれます。つづいて7世紀の初めごろに長塚古墳が、そして7世紀の前半に羽生田地区最後の権力者の墓である桃花原古墳が築かれます。富士山古墳の他は、すべて墳丘の表面を「葺石」が確認されています。

○茶白山古墳（国指定史跡）

墳丘の長さが91mを測る前方後円墳で、南に広がる水田面を見下ろすように築かれています。墳丘は幅広い墳丘第一段平坦面をもち、その周囲には深い周溝と周堤が完全な形で残っています。周堤を含めた古墳の総全長は140mに達します。明治年間に行われた発掘調査から、墳丘と周堤上に高さ約130cmほどの円筒埴輪が三重に巡ることが確認されています。また墳丘上からは、高さ約2mほどの家形埴輪の一部が出土しています。石室については、未調査のため不明です。

○富士山古墳（県指定史跡）

茶白山古墳の東側の丘陵上にある円墳です。墳丘は二段に造られ、第一段平坦面が幅広くとられています。墳丘の直径は86m、高さは約12mあります。平成5年度に行われた発掘調査により、墳頂部から二棟の家形埴輪と翳形埴輪が立てられていたことを確認しました。また墳丘第一段平坦面上からは円筒埴輪列とともに、馬や人物の埴輪を含む形象埴輪列も確認しています。

○長塚古墳（県指定史跡）

黒川東岸の台地上にある前方後円墳です。二段に造られた墳丘は、他の古墳同様に広い平坦面をもち、その上にも「葺石」が葺かれていることを発掘調査から確認しています。墳丘の全長が82m、高さは約7mあります。発掘調査から現在畑として利用されている部分には、幅6m・深さ1.5mほどの周溝が埋もれていることも確認しています。長塚古墳が造られた時代には、埴輪を並べる習慣は無くなりました。

○桃花原古墳

長塚古墳と同様に、黒川の東岸に築かれた古墳時代最後の円墳です。

墳丘は三段に造られ、墳丘第一段平坦面は幅広くとられています。墳丘の表面は「葺石」で覆われ、直径 63m・高さ 5 mを測ります。

平成 13 から 17 年度に発掘調査が行われ、石室の前面から川原石で造られた「前庭」と称される祭祀の場が県内では初めて完全な形で出土しました。その際、「前庭」からは石室内から持ち出されたと考えられる金銅張りの馬具や直刀、そして多量の鉄鍬の塊が出土しています。とくに「サルポ」と言われる渡来系の遺物が出土している点が特筆されます。



桃花原古墳前庭部

〔壬生地区〕

黒川の東岸の台地上に、6 世紀の後半に入り県内最大の前方後円墳の吾妻古墳が築かれ、続いて愛宕塚古墳、7 世紀の初頭に牛塚古墳、そして古墳時代終末期における国内でも最大級の規模を誇る車塚古墳が築かれ、壬生地区の権力者たちのお墓は姿を消しました。

○吾妻古墳（国指定史跡）

黒川と姿川が合流する東岸の台地上に築かれた全長 128mを測る県内最大の古墳です。二段に造られた墳丘の第一段平坦面は、どの古墳よりも幅広く造られ「しもつけ型」古墳の特徴を良くあらわしています。石室は前方部の先端部に巨大な自然石と凝灰岩を用い造られています。近年行われた発掘調査により石室内からは、甲の一部や銀装の刀子、馬具、ガラス玉などが出土しています。なお石室は江戸時代に盗掘を受け、大きな破壊を受けましたが、石室の一部の部材（天井石と玄門 県指定文化財）が壬生城址公園内に移設されています。

○愛宕塚古墳（国指定史跡）

車塚古墳と牛塚古墳の南に位置する前方後円墳です。平成 29 年度から発掘調査が行われ、二段に造られた墳丘の第二段目の斜面に「葺石」の施設があることが始めて確認されました。また、墳丘には小型の円筒埴輪が、周堤には大型の円筒埴輪が並べられており、場所により規格の異なる埴輪を配置している古墳であることも確認されました。

墳丘の全長は 84mあり、周堤の外側において確認された二重目の周溝を含めると、総全長 120mの古墳になります。



愛宕塚古墳埴輪列出土状況

○牛塚古墳（国指定史跡）

車塚古墳のすぐ西側にある前方後円墳です。前方部が短く、上から見た姿が帆立貝に似ていることから帆立貝型の前方後円墳とも言われています。近年実施された発掘調査の結果、周溝は浅く掘り下げた後で、中央部をさらに掘り下げる二段に堀を掘っていることが判明しました。二段に造られた墳丘の全長は約 50m、後円部の高さは約 6 m あります。牛塚古墳からは赤焼けの須恵器の甕の破片が出土しており、埴輪に似せるために赤く焼き上げたのでは、との説もあります。

○車塚古墳（国指定史跡）

古墳時代終末期における国内最大級の円墳です。墳丘は三段に造られ、墳丘第一段平坦面は幅広く造られています。平成 26 年度から 28 年度にかけて発掘調査が行われました。調査の結果、墳丘の直径は 84m を測り、周溝の底面から墳頂部までの高さは 11m あることがわかりました。また周堤の外側には幅 6 m の二重目の周溝がめぐることにも新たに判明し、二重目の周溝を含めた古墳の総全長は 120m に達します。

墳丘の表面は人の頭大の川原石で覆われ、墳頂部と各平坦部及び周堤上には、埴輪のように須恵器の甕が並べられていた。

石室内の調査からは、玄室の奥壁沿いから金銅張りの耳環やガラスの小玉、水晶製の切子玉が出土しましたが、その他の遺物から江戸時代以前に盗掘を受けたことがわかりました。

石室の前面からは、祭祀の場と考えられる「前庭」の一部が確認され、その付近からは故意に破壊された痕跡を残す甕や提瓶の破片が多量に出土しました。これまでに車塚古墳からは形のわかる土器の出土確認されていないため、今回の発見は古代下毛野国の古墳時代終末期の時期を絞り込む重要な須恵器となると考えます。



車塚古墳現地説明会



車塚古墳 西上空より撮影

下野市 甲塚古墳・国分寺愛宕塚古墳



甲塚古墳

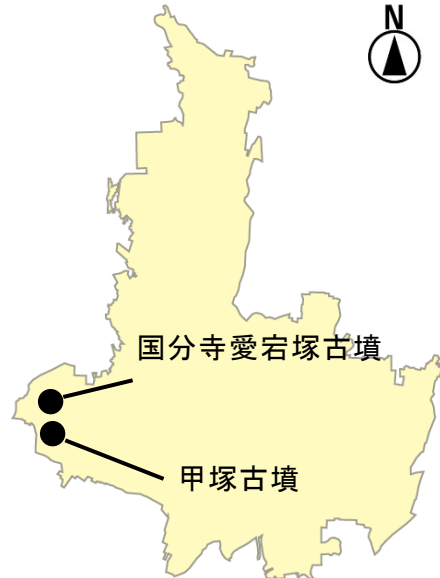
全長 80m の帆立貝形前方後円墳。発掘調査により、墳丘第一段目に円筒埴輪列が確認され、前方部西側に機織形埴輪をはじめとした形象埴輪が 24 基出土した。また、形象埴輪の近くから大量の須恵器・土師器が見ついている。これらは甲塚古墳出土遺物として平成 29 年に国の重要文化財に指定。



国分寺愛宕塚古墳

全長 78.5m の前方後円墳。現在は墳丘南側のくびれ部に愛宕神社の社殿が建てられているが、古墳の原形をよくとどめている。社殿の改修時に須恵器の台付壺やはそうが出土。前方部が大きく発達した形状であること、須恵器の年代観などから、甲塚古墳に次いで 6 世紀末頃築造されたと考えられる。

国分寺地域の古墳



機織形埴輪復元 CG



国分寺愛宕塚古墳復元 CG

下野市 山王塚古墳・丸塚古墳

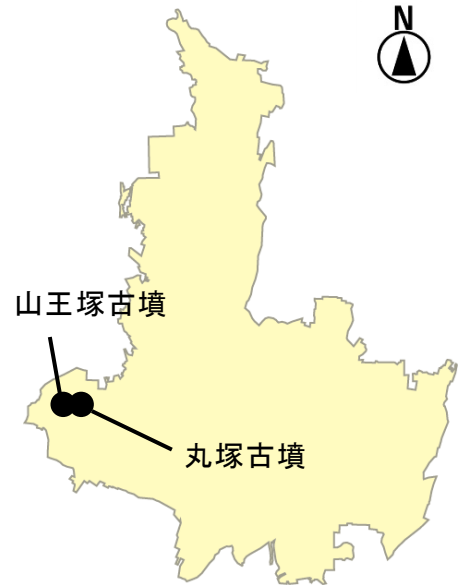


墳丘が2段に築かれた大型の前方後円墳。前方部が削平されているが、昭和62年～平成元年の調査により、規模は90mと推定。巨大な横穴式石室を持ち、玄門は1枚の凝灰岩をくりぬいた「割り抜き玄門」。石室からは鉄地銀張製帯先金具が出土し、国分寺愛宕塚古墳と前後して築造されたと考えられる。



全長74mの大型円墳。凝灰岩で造られた石室が開口しており、現在は石室内部を見ることができる。凝灰岩の一枚切石で造られた石室は、精巧な「切り組み」の技法が使われている。平成18年の調査ではガラス小玉が70点出土。埴輪が出土していないことから、7世紀以降の築造と考えられる。

国分寺地域の古墳

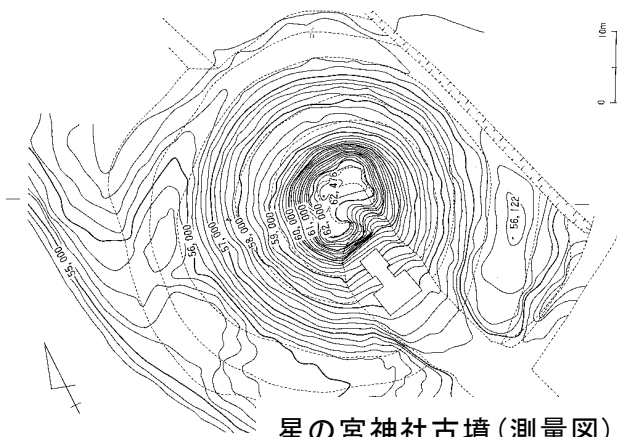


山王塚古墳復元 CG



丸塚古墳石室

下野市 星の宮神社古墳・三王山古墳・三王山 38 号墳



星の宮神社古墳(測量図)

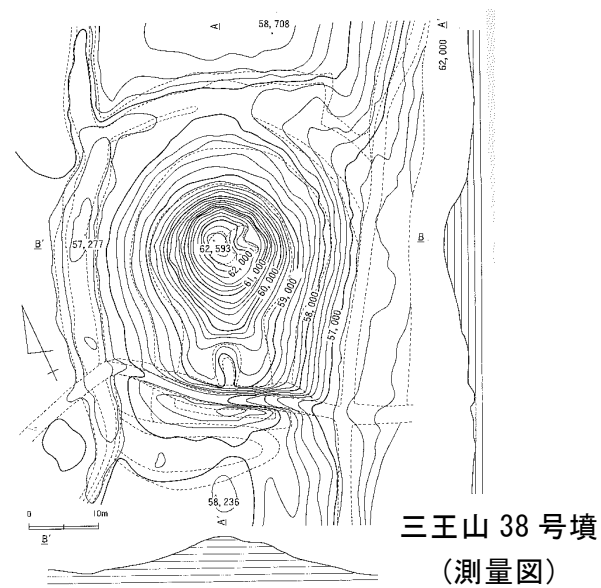
全長 43mの円墳。星の宮神社古墳を中心とし、ほか7基で古墳群を形成している。墳丘の南側には星宮神社が建てられている。発掘調査は実施されていないが、墳丘の各所で埴輪が採集されており、円筒埴輪のほか、人物・馬などが確認されている。6世紀後半頃の築造と考えられる。



三王山古墳

全長 85mの前方後円墳。良く形状をとどめており、その規模は三王山古墳群の中で最大。発掘調査は実施されておらず、埋葬施設や副葬品等の詳細は不明。葺石や埴輪が見つからないことや、前方部が大きく発達した形状であることから7世紀の初め頃の築造と考えられる。

三王山地域の古墳



三王山 38 号墳 (測量図)

全長 51m の帆立貝形前方後円墳。三王山古墳の北側に隣接して築造されている。前方部の前端に盗掘された形跡があり、河原石や小砂利が確認されている。発掘調査は実施されていないため、埋葬施設や副葬品は不明。そのほか葺石、埴輪、土器も確認されていない。

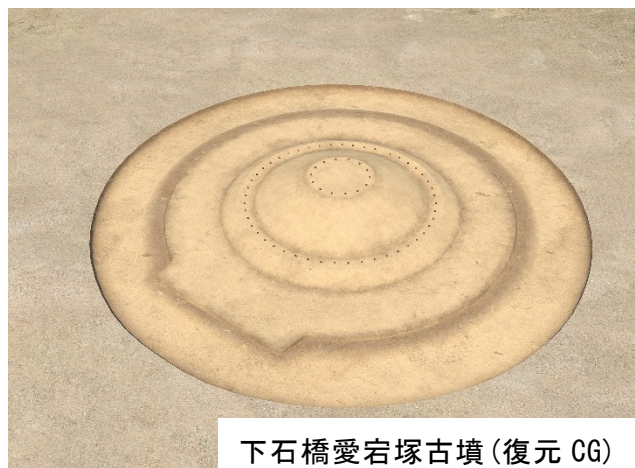
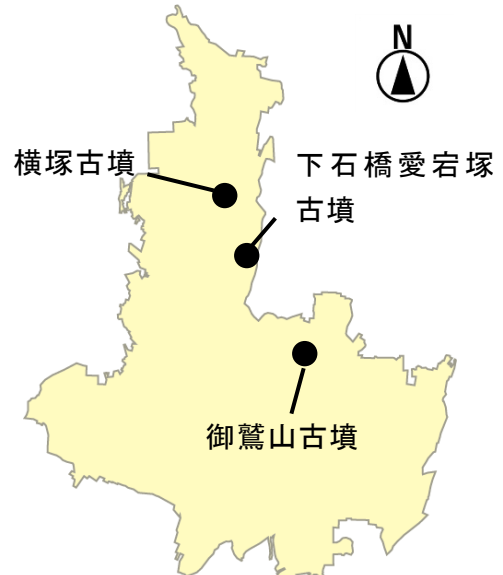
下野市 横塚古墳・御鷲山古墳・下石橋愛宕塚古墳



横塚古墳

全長 75mの前方後円墳。明治時代から昭和にかけての調査から、直刀、刀子などの武具類、耳環、玉類、馬具類、須恵器、土師器、埴輪等が出土。平成 26 年度の調査では周溝と横穴式石室を確認。抉り込み土坑からは土師器の坏や耳環が出土。現在は石室の奥壁に使われた凝灰岩が残されている。

石橋・薬師寺地域の古墳



下石橋愛宕塚古墳(復元 CG)

全長 82mの帆立貝形前方後円墳。JR 東北本線・東北新幹線の建設により、現在墳丘は消滅している。石室内から多くの馬具類が出土している。そのほか、須恵器甕の破片が多く出土していることから、墳丘に甕が並べられていたと考えられる。



御鷲山古墳

全長 85mの前方後円墳。宅地のため墳丘南側は削られている。下野薬師寺のすぐ北側に造られていることから、下毛野一族に関係のある墓と考えられる。墳丘から埴輪が、石室内から武器・武具や馬具類が出土している。6世紀の後半に築造されたと考えられる。

上三川町 多功大塚山古墳・上三川兜塚古墳・上三川愛宕塚古墳

上三川町は、東から鬼怒川・田川・姿川に挟まれた南北に細長い台地上に位置しています。その台地上に大小200基を超える古墳が存在しています。町の面積に占める古墳数は、県内でも有数です。今回紹介する古墳は、しもつけ古墳群に関連する古墳で、いずれも上三川町指定文化財となっています。

1 上三川愛宕塚古墳（上三川小学校から南へ200m／愛宕山公園内）

全長約40～50mの円墳です。現在は、墳丘は残っておらず、横穴式石室のみが公園内に保存されています。築造は、6世紀末頃と考えられます。石室は、凝灰岩の扁平な切石を組み合わせ築かれており、入口は板石をくり抜いています。

元々は現在の場所より約30m南にありましたが、忠魂碑を建てるにあたり現在の場所へ移設されました。



2 上三川かぶと塚古墳（上三川中学校から東へ300m／県道宇都宮結城線沿い）

全長約45m、高さ4.5mの円墳です。2段に塚を盛り上げて造られており、その姿が兜に似ていたことからこの名が付けられました。墳丘は残っておらず、現在は横穴式石室のみが保存されています。築造は、6世紀後半と考えられます。愛宕塚古墳石室同様、凝灰岩の一枚岩を組み合わせ造られています。

明治13年に発掘調査が実施され、土師器や埴輪、勾玉などが出土したと記録されています。今年の6月から7月にかけて実施した発掘調査の結果、幅約14m、深さ1.7mもある周溝を確認しました。



3 多功大塚山古墳（上三川高校から北へ600m／県道352号線から南へ100m）

直径約53mの方墳です。平成4年の発掘調査により、古墳時代の終わりに築造された栃木県最大規模の方墳であることが分かりました。周辺には下野薬師寺をはじめとする大規模な遺跡があることから、これらを築いた有力者の一族の墓とする考えもあります。

現在は畑になっており、若干ながら墳丘の高まりを確認できます。



栃木市 岩家古墳・天王塚古墳



岩家古墳



岩家古墳石室



岩家古墳・天王塚古墳位置図



天王塚古墳墳丘断面



天王塚古墳全景

小山市 琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳

(1) 琵琶塚古墳

- 史跡指定：T15 国史跡指定、S56 追加指定（指定面積 57,788.94 m²）
- 調査実施状況：第 1・2 次調査（S53・54）、第 3 次調査（H2）、第 4 次調査（H25～29）
- 調査成果：非対称となる周溝の平面形態や「しもつけ古墳群」の初源となりうるテラスを確認。特に、4 次調査では新たに後円部第 2 段テラス・周堤上で埴輪列を確認すると共に、周堤の造成方法を含めた旧地形（旧表土）と古墳の関係・築造方法を確認。

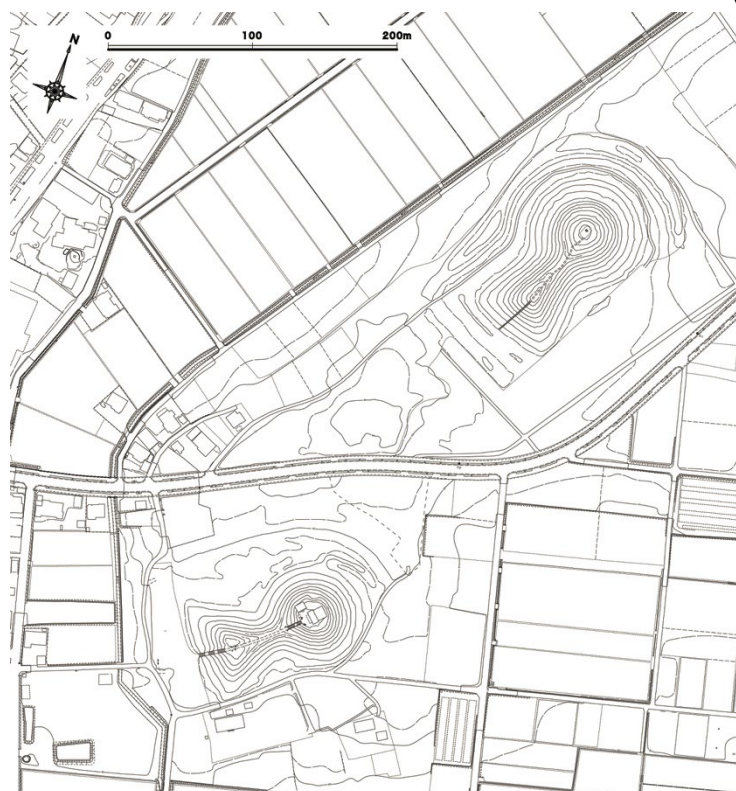
(2) 摩利支天塚古墳

- 史跡指定：S53 国史跡指定、H14 追加指定（指定面積 42,701.88 m²）
- 調査実施状況：第 1～3 次調査（S55・56・57）、第 4・5 次調査（H8・9）
- 調査成果：二重周溝をはじめとする古墳の規模を確認。墳丘上には少なくとも 2 段に埴輪が巡り、埴輪群像は前方部テラスに想定される。墳形、埴輪から 5 世紀末～6 世紀初頭の築造と考えられる。

(3) 史跡整備の進捗

- 公有化事業：両古墳共に S56 より開始。公有化率は琵琶塚 55%、摩利支天塚 54%。
- 計画・設計策定：S59 環境整備計画、H24 整備基本構想、H25 整備基本計画策定。
- ガイダンス施設：H28 工事着工、H30.4「国史跡 摩利支天塚・琵琶塚古墳資料館」開館。

(左) 測量図（北：琵琶塚、南：摩利支天塚）



(下) 琵琶塚・摩利支天塚比較表

	琵琶塚	摩利支天塚
墳長	124.8m	120.6m
総長	200.6m	197m
後円部径	76m	71.1m
くびれ幅	40.4m	34.5m
前方部幅	65m	82.5m
後円部高	12.5m	10.9m
くびれ高	8.9m	5.4m
前方部高	10.2m	7.9m
埋葬施設	未確認	未確認
築成形態	前方部 2 段 後円部 3 段	前方部 2 段 後円部 2 段

シンポジウム「未来をひらけ！しもつけ古墳群」

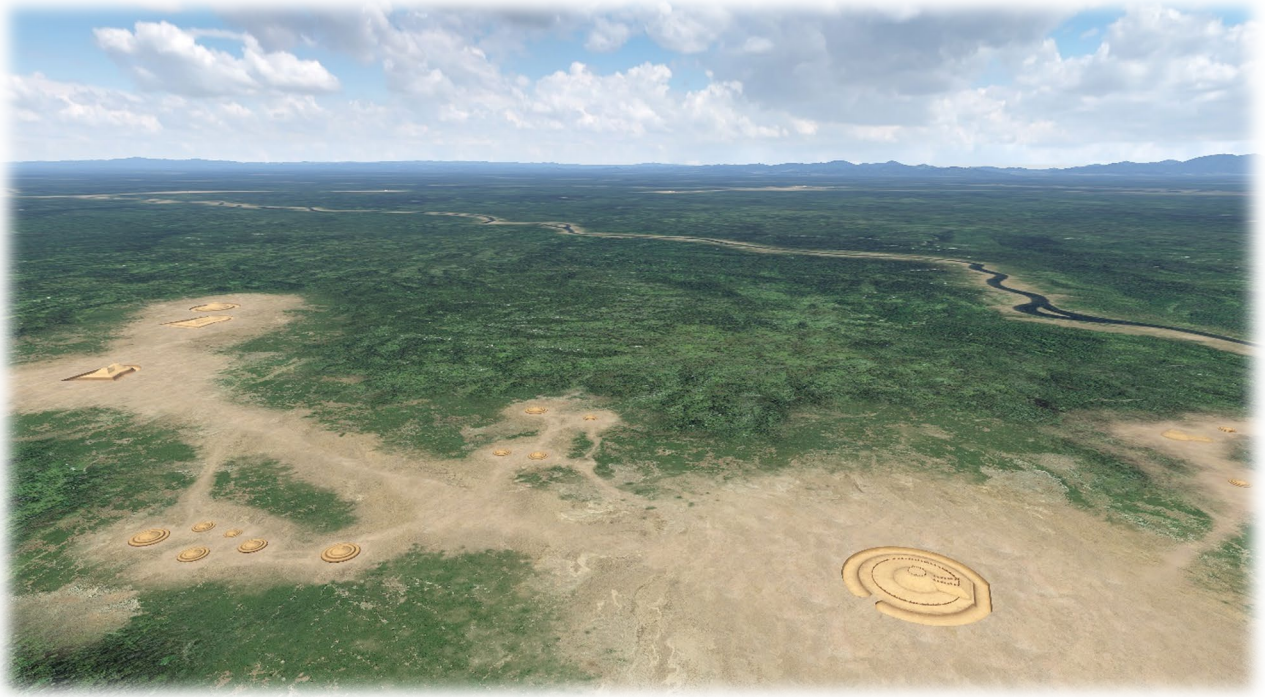
発行日 平成 30 年（2018）12 月 9 日

発 行 下野市教育委員会

〒329-0492 栃木県下野市笹原 26

Tel.0285-32-6105

※本事業は、栃木県「わがまち未来創造事業」の補助を受け実施しています。



しもつけ古墳群復元 CG